

# 写真新世紀

New Cosmos of Photography



Vol.24

2009

# 写真新世紀

New Cosmos of Photography 2009 vol.24

写真で何ができるだろう？

写真でしかできないことは何だろう？

「写真新世紀」は、写真表現の新たな可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的に1991年にスタートしたキャノンの文化支援プロジェクトです。公募形式によるコンテストの実施を中心に、各地での受賞作品展の開催や作品集の制作、ウェブサイトでのニュース発信など、総合的な活動を行っています。作品サイズ、形式、点数、年齢、国籍など、応募制限のないこのコンテストは、銀塩・デジタル写真をはじめ、自由で独創的な写真表現を応援しています。これまでにオノデラユキ氏や佐内正史氏、蜷川実花氏、澤田知子氏など、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。

[canon.jp/scsa](http://canon.jp/scsa)

INDEX	●	2009年度(第32回公募)
2	●	グランプリ クロダ ミサト
9	●	グランプリ発表
10	●	優秀賞選出審査会報告
12	●	グランプリ選出公開審査会報告
14	●	写真新世紀東京展
15	●	審査員プロフィール
	●	優秀賞
16	●	Adam Hosmer
22	●	杉山 正直
28	●	高橋 ひとみ
34	●	安森 信
40	●	佳作
49	●	ゲスト審査員 蜷川 実花 インタビュー
54	●	2008年度グランプリ 秦 雅則 インタビュー
60	●	写真新世紀の歩み

<表紙の作品>  
「幼稚な心」 秦 雅則 (P.56 参照)



クロダ ミサト

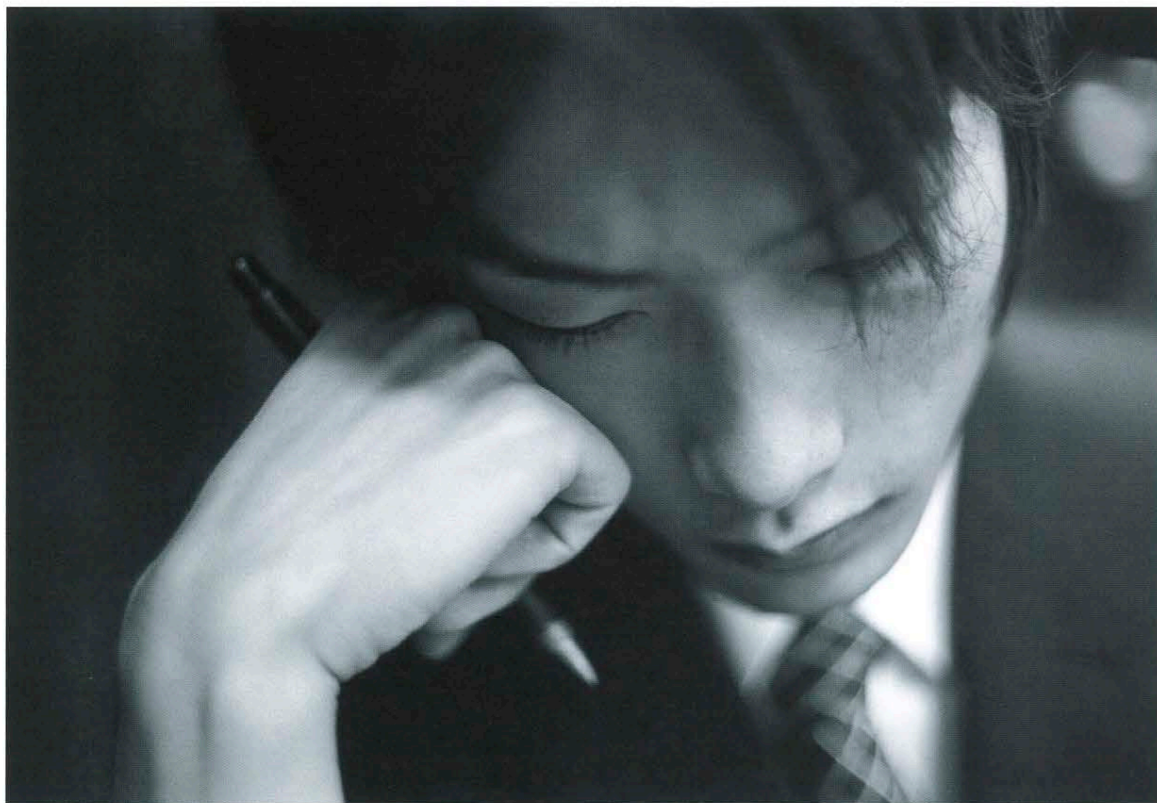
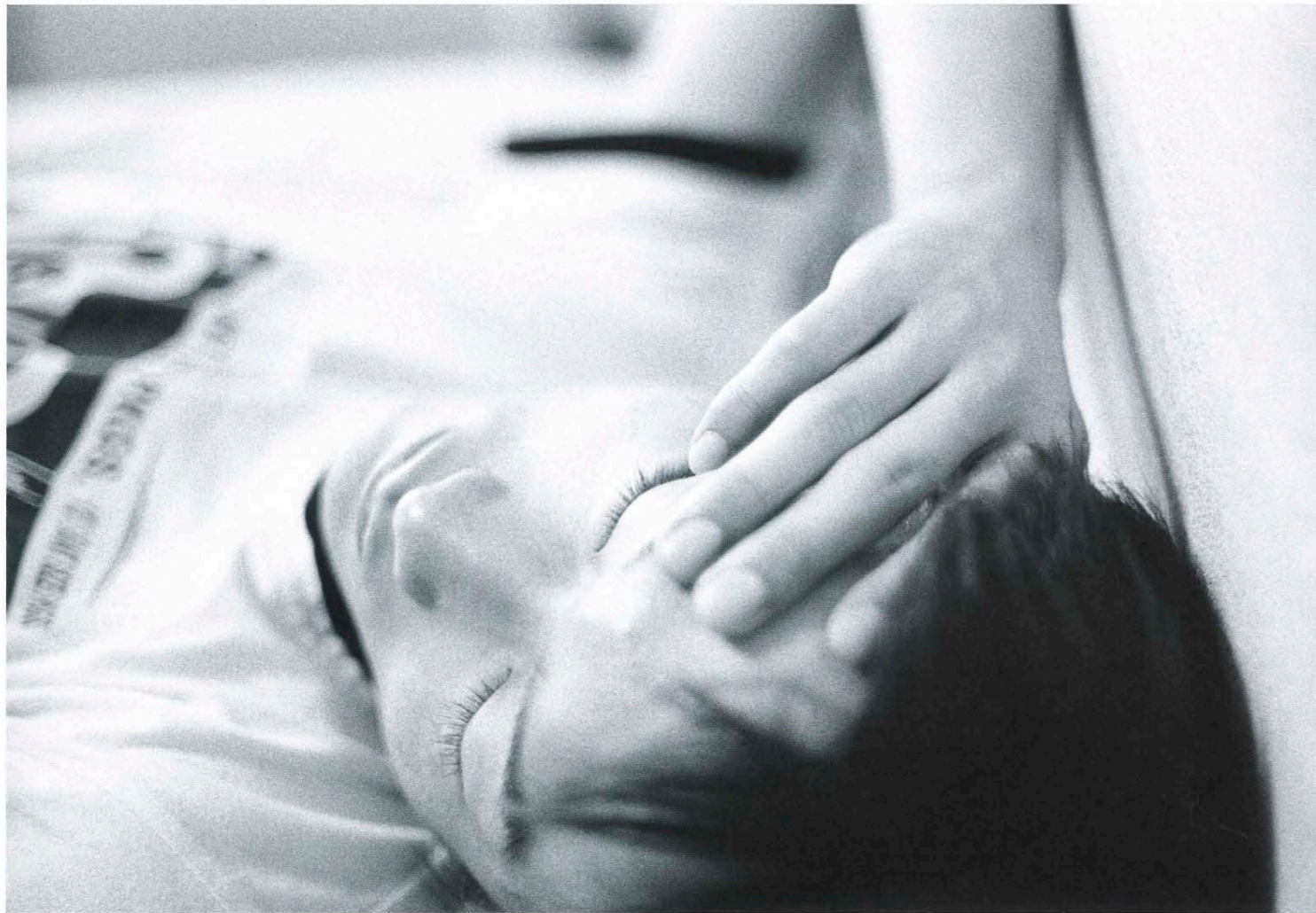
「He is …..」











#### 受賞者コメント

デジタルカメラが流行し、今ではほとんどの人がデジカメを持っています。

よく聞く話ですが、旅行に出かけたりして、きれいな景色を見たりすると、みんな夢中でシャッターを押すんですね。興奮しちゃって何枚も同じ写真を連写するんです。でも旅行も終盤になって来るとカメラの中のデータがいっぱいになっちゃって、もう写真が撮れない。そうするとみんな何するかって、写真のデータを消すんです。何枚も同じ写真があるから、その中の一番良い一枚を残して、あとは消しちゃうんです。結局一番良い一枚が残るのだから、それはそれで良いんです。そこがデジタルの良いところなんだし。でもデータを消すことで、あの夢中でシャッターを押した気持ちや、撮影した行きすらも消している気がして寂しく感じました。

彼と過ごした大切な時間を感じて欲しくて、この写真集を作りました。

#### 選：蛸川 実花

素直さに引かれます。いい写真を撮ろうというよりも「ああ、彼のことが愛おしくて仕方ないんだなあ」と。とても個人的なことなのに一般化されて気持ちが直接伝わってくるんですね。幸せな時を残しておきたい、それが写真を撮る基本的な姿だと思います。

#### 選(佳作)：荒木 経惟

彼女の思いが全面に出てる。表紙のように、いつも裸の気持ちで撮ってるんだよ。一枚のカットに前後があって、恋心を止めてないのがいい。普通はこういうの撮るとクサインだけど、すごく気持ちいいしやさしい。大きさもつくりも、いい本だよ。



クロダミサト  
「He is ...」

ブック / A3 / 180ページ / インクジェットプリント

#### プロフィール

1986年 三重県に生まれる  
2006年 京都造形芸術大学情報デザイン科  
写真コース入学



## クロダ ミサト インタビュー

クロダミサト氏は応募の時点で京都造形芸術大学の4年生だった。

ディスカッションなどを通して作品の質を深められる、大学という場を大切に思っていると語った。

写真に対する思いや、被写体との関わり方などについて聞いた。

インタビュー・文=鳥原 学

### 被写体への愛を表現したい

クロダさんは、恋人の写真を撮っていらっしゃるのですか？

微妙に違ってセックスをした相手の写真です。最初は、夏休みの課題発表のために、大学に入学して知り合った半同棲状態の同級生の写真を撮ったんです。その後、友達から男と女の間になった男性2人の上半身ヌードを撮影して発表したら、周りの人たちにすごく褒められた。それで、関係を持った相手を撮ることに意味があると思ったんです。行為をしたから生まれる「情」が写真に表れるんだと。

また、セックスをすることによって、相手にすごく近づいたような、相手のことがわかったような気持ちになれるんです。その気持ちのおかげで写真が自由に撮れるんです。私はそれを大切にしていきたいと思っています。

彼らとの関わりをもう少し教えてください。

誰かが「写真はこの世で唯一時間が止められる道具」だと言っていました。初めてそれを聞いたときには、いつのことだったか覚えていないんですが、魔法のようだなと思いました。私は自分が愛している人と肌を重ねているときが一番幸せで、その時間を止めてたくて写真を撮り続けています。

関係を持つと、相手のことがとてもわかってくる。相手が自分に好意を持ってくれていることもわかると、自然に楽な気持ちで撮れる。被写体に愛を感じたいという気持ちがあるんです。写真を続けるうえで、私は現象やプリントといった制作過程を全部好きでいたかったんです。被写体が好きな人だったら、何をやっても楽しくて愛おしいから。世の中には、つらいことがあっても元気に生きている人は何万

人もいます。私もいろいろなものに愛を感じて生きていきたいし、写真も被写体も大好きですという感じでやっていきたいんです。

### 時間が止まった写真に思いを込めて

今回の作品で撮っているのはどんな人なのですか？

2年近く、ずっと好きだったんです。何回か撮影したものを学校に提出しているのですが、「すごくいいからもっと撮り続けなよ」と周りから言われて。すごく好きだったから、ずっと撮り続けてきました。最終的には、この人が就職したことでふたりの関係が終わりました。この写真は、彼のマンションを解約して私の部屋で最後の夜を過ごした翌朝に撮りました。そして彼がいなくなったマンションの写真まで撮ってストーリーを作り、泣きながら作品をまとめたんですね。

ふたりの関係性の中で、カメラがあると邪魔にならないですか？

カメラが邪魔だと感じたことは一度もありません。写真を撮っているのが私なので。今の彼は、一緒に暮らしているので、1日1枚は撮るといいますが。常に作品にしようと思って撮っているわけではなく、撮りたいから撮るとい感じです。大量にあるカットの中から、プリントアウトするものを選んで、それをさらに4分の1くらいに減らして作品としてまとめました。

まとめるときに、何を大事にしていらっしゃいますか？

写真は、静止画で動きも音もないけれど、情報はすごく詰まっている。時間が止まって

いる1枚に、思いや動きを込めるのはすごく難しいけれど、すごく面白いことだと思っています。それに作品を並べて構成することで、動きが出てストーリーが生まれていくのも面白い。いかに見やすいストーリーにするかを一番大事にしています。

今回、ベタ焼きをポートレートと一緒に入れたのは、好きな人をすごく夢中になって連写しているところや私の目線の動きまで見せたいと思ったからです。今はデジタル写真が主流で、それはそれでいいところがあるんですけど、画像を消してしまえるのが好きじゃなくて。

将来は、どういう風になっていきたいと思っていますか？

今年で卒業なんですけど、大学院に進もうと思っています。刺激し合える仲間がいて、教えてくれる人がいて、モチベーションを高く保てる環境だから。大学院を終了した後のことは具体的に決めていないんですが、人物を撮るのが好きなので、そういう仕事をできればと思っています。今、兄と弟を撮っているんです。関係を持たない、持つことのない男性。しかし、とても身近に感じる男性なので、それでもなお愛情深く撮れることが目標です。

グランプリを受賞して思うことは？

もちろんグランプリを受賞できたことは嬉しいですが、他の優秀賞を受賞した仲間とは、写真新世紀の受賞は目標ではなく通過点として考えようと話しています。過去にグランプリではなく優秀賞や佳作を受賞されて活躍されている写真家の方もいます。だから賞を受賞したことが大きなきっかけでした。そこが始まりだと思っています。

(2009年10月2日/12月3日)

# 写真新世紀 2009

## 2009年度グランプリはクロダミサト氏に！

幸せな時間を写し止め、写真の力が素直に表れた「He is …」に決定

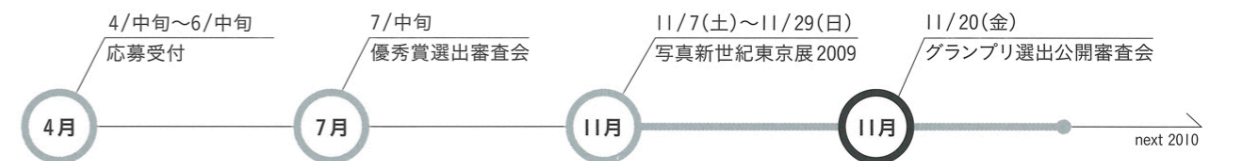
2009年度(第32回公募)のグランプリ選出公開審査会が、2009年11月20日、東京都写真美術館1階ホールにて行われた。グランプリに選ばれたのはクロダミサト氏。受賞作の「He is …」は、彼と過ごした幸せな時間、幸せな気持ちを写し止めたもの。クロダ氏は「時間を写し止められる写真は魔法のようだ」と写真の力を知ったときの感動を語り、その写真で彼と共有した時間を作品化した。写真の技術はもとより、気持ちがストレートに表れた作品が審査員に高く評価された。受賞の挨拶でクロダ氏は、「すごく嬉しくて、なんと言っていかにすぐには言葉が出てこないですが、今ここに立ってられるのは仲間たちの支えがあったからこそ。本当にありがとうございました」と喜びを語った。



写真新世紀2009年度グランプリに輝いたクロダミサト氏

### 春の公募から2つの審査会を経て11月にグランプリ決定

32回目となった2009年度の公募は、3月に審査員の発表とともに公募実施のアナウンスをし、4月中旬から6月中旬まで応募を受け付けた。1,340名からの応募を受け、7月キヤノン株式会社下丸子本社で行われた「優秀賞選出審査会」において、審査員による厳正な審査のもと、審査員ごとに優秀賞および佳作を選出した。そして、11月に写真新世紀東京展2009が開催され、その会期中に行なわれた「グランプリ選出公開審査会」において、優秀賞受賞者5名の中からグランプリ受賞者が決まった。



応募者数 1,340名

グランプリ受賞者 クロダ ミサト

優秀賞受賞者 Adam Hosmer 杉山 正直 高橋 ひとみ 安森 信 (人名は全て五十音順、敬称略)



# 優秀賞選出審査会報告

2009年7月中旬、キヤノン株式会社下丸子本社にて、応募作品から優秀賞と佳作を選ぶ「優秀賞選出審査会」が行われた。応募作品はストレートな写真やチャレンジングなもの、形態もプリントやブック、立体物などバリエーションに富んでおり、審査員が目を見張る作品も多数。集まった5名の審査員は、1点ずつ熱心に作品を見て回り、時には審査員同士が議論を交わしながらも審査は和やかに進んだ。結果、各審査員が推す優秀賞受賞者5名、佳作受賞者18名を選出した。

レギュラー審査員

荒木 経惟  
飯沢 耕太郎  
南條 史生

ゲスト審査員

榎本 了幸  
蛭川 実花

(人名は全て五十音順、敬称略)

## 荒木 経惟

デジタルがダメというんじゃないけど、どれもデジタル的な気分になっているんじゃないかな。ただ省略すればいいと思っただけに見えるからね。それと世間の流れで「アート」が流行っているから、テクニックでもってアートにしようとしている。

なんでもない写真じゃ表現の程度が低いとか、ダメだと思っただけで、実はそれが一番大切なこと。表現は世間や被写体がしているんだから、写真家はそれを撮らせていただくという気持ちで大事なんだよね。被写体とか時代とかを利用して、自分でこねくり回してつくるのが写真の本質じゃないんだ。

毎年言っているけれど、被写体に対する愛がないとか、どんどん希薄になっているように感じる。死にゆく人を撮っている作品も多いけれど、そんなのはもう止めたほうがいいよ。撮っても、ここには出さない。それよりも、被写体の生き生きとした瞬間を撮ることが、今は大切なんだよ。

テクニックだとか表現だとかより、まず人を感じて、その時を大切にすること。崇高な思想とかよりも、目の前の人やことが一番。そうすれば結果はついてくるんだよ。

みんな先が見えているとか、世の中こんなものだ、という思い込みがあるんじゃないかな。ただし、ずっと撮り続ければ分かってくると思うよ。撮り続けることは、生に向かっていくことなんだって。

## 飯沢 耕太郎

選考にあたり、いつも思うのは、自分の認識というか世界観を変えてくれるような作品に出会いたいということ。ただきれいなものを写したのや、方法論を説明するための作品では物足りません。

今回の応募を見ると、全体のレベルが落ちているわけでもないし、表現のバラエティーも豊かだと思う。ただ、選んでいても爽快感はなかった。ということは応募作品に突き抜けたものが少ないということ。ブックでの応募作品を見ても、最初から最後のページまで、テンションを維持できていないものが多い。妙に自分の可能性を低いところに設定しているのかもしれない。時代の閉塞感の中で、自分を自分で抑えつけているような気もしますね。

若い頃は背伸びする部分が大事だと思うんです。そこに大きな作家になっていく予感というか、可能性を感じますから。だから、もっとカッコをつけて欲しい。ヒントとしては、個人的なこだわりを強く打ち出すこと。たとえば、ひとつのものを徹底的にコレクションしてオタク的なとこまでいくとか。そこから新しい表現が芽生えるかもしれない。

あとは、細やかさを大切にしたい。工芸的なレベルに届くほどの質感へのこだわりがあっても良い。その点が日本人のもっとも得意な点ですから。全体的に仕上げの雑な作品が多いのは、残念だと思います。



審査員：左から榎本了幸氏、荒木経惟氏、蛭川実花氏、飯沢耕太郎氏、南條史生氏。



広い会場を埋めつくした応募作品。点数が多いため審査は長時間に及ぶ。作品について議論しながら、審査員はそのひとつひとつを時間をかけ熱心に見ている。



## 南條 史生

今年は非常に整理された作品が多かったという印象です。自分の世界をちゃんと把握して作品にしている。

その一方でハメを外す、あるいは暴力的に壊れているような作品は非常に少なかった。イメージを操作しているアート系の作品でも、大掛かりなものはなく、個人のできる範囲でやって、手堅くまとめようとしている。以前はもう少しスケールが大きくて、めちゃくちゃな作品が応募されていました。つまり最近では自分の狭い範囲に収まっているのではないかと。

こうした傾向は、ネガティブな世相と関係があるかもしれない。現在は景気も悪くて、社会も暗い雰囲気です。けれどその雰囲気を壊すのではなく、自分の作り出すファンタジーに入っていく。逃避なのかはわかりませんが、そういう傾向があるようです。

社会を開拓できると思う人間は、もっとポジティブな主題をみつけられるはず。少なくとも、そういう元気に前に進む空気は感じられない。だからテーマとして多いのが私的なものになるのかも。たとえば家族、恋人、友人、国内の旅、あるいは自分の作り出した仮想の空間。こうした傾向はもともとあったけれど、特に今年は目立ちました。

作品がまとまっているだけでは弱い。完成度の追求とそれを破るものが同時に必要で、ふたつが揃うと厚みが出る。そのためには、たくさん作るしかない。数をこなすと、そのバランスが分かってくるんです。さあ、みんな、政治も変わったから、我々も、もっと再構築を考えなきゃ。

## 榎本 了幸

百年に一度の世界恐慌が、写真の世界にまで忍び寄ってきた。そんな侘びしさ、切なさを感じましたね。スナップを撮っていても、おもしろくない世間が対象だから、画面にもおもしろいものは出てこない。

画像を作るスキルだけではおもしろくなるわけではないし、それでは力を失った情景にしかならない。これは写真を撮っている人のというより、社会の問題でしょうね。

作家の問題としてみると、多くの作品が突き詰め切れていない、沸点に至っていない感じがします。写真ってこんなもんか、という程度で勝負している人がかなり多いと感じました。その結果、小さな共感しか得られないような作品しかできていない。今回の選考で目にしたのはひとりの人物を追った作品、ことに年齢を経た女性を対象にした作品が多かったことです。ただ、どの作品も小さくまとまっていて、被写体を通じて作家が大きなメッセージを発するところまでいっていない。

作家が壁を破るためには、圧倒的にクリエイションしていくしかないし、そのクリエイションって、どこか過激な部分がないとだめなんです。これすごい、とんでもないと言わせるまで突き詰める力ですね。

世界におもしろいことがない時代は、世界に寄り添っているだけじゃだめ。世界を変えたい、世界はこんなじゃないと思う気持ちが必要だと思います。今回はちょっと希望が感じられなかったですね。

## 蛭川 実花

まず全体的には、似たものが多かったという印象を持ちました。日常の中の不穏な空気感とか、日常の中のちょっと奇妙な瞬間を写したりとか。それと前回賞を獲った作品に似ているものも多かったと思います。賞のために写真を撮っているわけじゃないと思うので、「こうしたら賞を獲れる」と狙った作品は見ていて腰が引けてしまいます。

新しい表現って何だろうと思っながら選考したんですが、結局は感情移入しやすい写真、あまり奇をてらっていないストレートな作品を中心に選びました。あまり新しいものにこだわると本質的なものを見失う、そうあらためて気づきました。新しさより、写真に残したいという気持ちのほうが大切です。

私が応募していた時代よりも、作品の見せ方はずっと上手くなっています。ただ、最後の仕上げの過程や色の出し方、そういったフィニッシュの技術だけで見せているように思えた作品もあります。

圧倒的な表現には出会えなかったという気はします。そんな作品に出会って、私自身が焦って来たかという。みんな本当に上手なんですけど、あまり印象に残らない。

今回の応募作品に限らずですが、何か写真家の「写真力」というものが、全体的に落ちているということが気になります。核になるものがあれば、多少仕上げがまずくても、写真はちゃんと成り立つと思います。

今回、選んだ方が受賞を辞退しました。辞退するのなら始めから出さないでほしいです。



# グランプリ選出公開審査会報告

2009年11月20日(金)に、グランプリ選出公開審査会が開催された。会場となった東京都写真美術館1階ホールは、多くの来場者が集まり熱気にあふれるなか、グランプリ候補である優秀賞受賞者からのプレゼンテーションと審査員との質疑が行われた。

## グランプリ候補の5名が作品への思いを熱く語る

グランプリ選出公開審査会に臨んだのは、優秀賞を受賞しグランプリ候補となっているAdam Hosmer氏、クロダミサト氏、杉山正直氏、高橋ひとみ氏、安森信氏の5名。また審査員は、レギュラー審査員の荒木経惟氏、飯沢耕太郎氏、南條史生氏に、ゲスト審査員の榎本了亮氏と蛸川実花氏を加えた5名。

審査会は、各候補者がそれぞれ約5分間のプレゼンテーションを行い、続いて審査員との質疑応答をするという形で進められた。候補者のプレゼンテーションは個性的でハイクオリティなもの。それぞれの作品制作のきっかけや、そのプロセス、制作意図などが語られ、興味深い内容となった。

最初にプレゼンテーションを行ったのは、日本在住で日本人女性と結婚したAdam Hosmer氏。自分や妻の家族のポートレート写真にデジタルで描いた細かな線を載せるという作品を、「単なるポートレートではその人の一部し

か見えないような気がする。絵を載せることで、その人の見えない部分が見えてくると思う」と流ちょうな日本語で自身の作品を解説した。

続いてプレゼンテーションを行ったのはクロダミサト氏。「彼と過ごした幸せな時間、彼への気持ちを見てもらいたくて制作した」という作品は、彼への思いが詰まった写真集。高い技術に裏付けられながらも素直に表現された作品は、写真の力を再認識させる。「写真を撮ることも、写真を並べてストーリーが生まれることにも楽しさを感じる」と、作品だけでなく写真への思いも語られた。

中南米の12カ国を旅行し、旅先で自分を含めた写真を撮り続けたのは杉山正直氏。横を向いた自分に向けてカメラを構え、周囲の人々も含めた背景を写し込んだ写真は、コミュニケーションメディアとしての写真の役割もアピールする。展示には来場者がコメントを書いた紙を作品の周囲に自由に貼れるようにし、最終日に来場者参加型の展示作品を完成させるという、杉山氏が「楽しさのループ」と呼ぶ仕掛けを施した。「旅先で出会った人

との交流を、今回見に来てくれた人との交流にも連鎖させたい」と、その意図を明かした。

会場に不思議な雰囲気を充満させたのが高橋ひとみ氏。作品は、テレビに映したビデオ映像をカメラで撮影したもので、愛犬「ピッコロ」を始めとした動物に対する思いが、彼女の独特のものの見方を通して表現されている。「作品名のコロニーとは、動物の群れという意味ですが、同時にこの写真群を見たとき、大好きな写真をずっと見ていたいと思った自分の感想」でもあると語った。

最後にプレゼンテーションしたのは安森信氏。最初に挨拶をした以外は、最後までニュースキャスターのように第三者の視点で客観的に自身の作品制作について語った。作品は「山口県長門市で働く60歳以上の女性」がコンセプト。5回目の応募で優秀賞に選ばれた安森氏は質疑の中で、「これまでいろいろな手法を試みましたが、この作品では原点に戻ろうと思いました」と女性の生き様を捉えたストレートな写真の制作意図を語った。



グランプリ選出公開審査会の様子。向かって左が候補者、右が審査員



Adam Hosmer 氏



杉山 正直氏



高橋 ひとみ氏



安森 信氏

## グランプリは「He is …」のクロダミサト氏に決定

候補者5人のプレゼンテーションと質疑が終わったあと、審査員は別室に移動してグランプリを決定する会議が行われた。審査員それぞれが推す候補者がおり、議論が白熱。吟味されたのは、力のある作品かどうか、新しい写真表現や写真を使った新しい表現であるかどうか、そして作家の将来性など。会議ではまた、写真新世紀のコンセプトや、写真の本質とは何か、写真とアートの区別は何か、などについても候補者を交えながら活発に議論され

## 写真新世紀が求める写真とは？そして未来への期待

表彰式の後、5名の審査員それぞれから講評が語られた。荒木氏は「写真にはいろいろな魅力があり、一人ずつ個性がある。これから新しく始まるんじゃないかと、それぞれの作品を見て思った」と受賞者に対する期待を込めた。飯沢氏は「クロダさんは写真に向き合う姿勢がいい。写真を撮る力はもちろんあるんだけど、本人がこれから写真家としてやっていこうとする力を感じます。ちょうど蛸川さんが出てきたときのようです」とグランプリを取ったクロダ氏の姿勢を称えた。南條氏も「クロダさんは写真がうまいですね。写真表現のポキャブラリーも豊かで可能性を感じます。また作品に表れている男性との距離感は、むき出しの写真よりも愛を感じます」とクロダ氏を評する一方、応募作品全体として「写真とは何かという定義を問い直すような作品がなかった。写真という既存概念を変えさせてくれるよ

うな作品の登場を期待したい」と語り、写真の可能性について改めて問いかけた。

榎本氏は「全体で見ると、実験的でチャレンジングな作品もありました。そのような新しい表現を求めている作品と、写真の持っている力で戦おうとする作品のせめぎ合いだったように思います」と応募作品の傾向に触れ、また「コンテストでは作品自体の力を評価するのと同時に、その人が何を目標そうとしているのか、その可能性も読み取ろうとします。その総

合的な評価でクロダさんが選ばれました」と語った。最後に自身も1996年度(第13回公募)の写真新世紀で優秀賞を受賞した蛸川氏は「優秀賞を取れば実力が評価されたようなものです。ここから何を始められるかが大事。それは自分自身も実感としてあるので頑張ってください。もちろん佳作の人も同じです。ぜひ可能性を追求してください」と受賞者全員にエールを送った。



各審査員が最後に講評を行った

Mark II EF24-105L IS Uレンズキットの目録が授与された。



表彰を受けるクロダミサト氏

合的な評価でクロダさんが選ばれました」と語った。最後に自身も1996年度(第13回公募)の写真新世紀で優秀賞を受賞した蛸川氏は「優秀賞を取れば実力が評価されたようなものです。ここから何を始められるかが大事。それは自分自身も実感としてあるので頑張ってください。もちろん佳作の人も同じです。ぜひ可能性を追求してください」と受賞者全員にエールを送った。



表彰式後、記念撮影が行われた



## 優秀賞および佳作に選出された受賞者の作品を一堂に展示

2009年11月7日(土)から11月29日(日)まで、東京都写真美術館地下1階展示室において、写真新世紀東京展2009が開催された。今回の写真新世紀への応募者は1,340名。そのなかから厳正な審査により選ばれた優秀賞受賞者5名、佳作受賞者18名の作品が展示された。

優秀賞受賞者の作品は、Adam Hosmer氏の「1/2」、クロダミサト氏の「He is ...」、杉山正直氏の「オレハ・オララ」、高橋ひとみ氏の「コロニー ※colony=繁殖のための群れ」、安森信氏の

「女性讃歌」。大きなプリントの展示だけでなく、壁面を埋めるベタ焼きとプリントを組み合わせたもの、モニターを活用したもの、子どもの目の高さを意識したもの、写真の並べ方でタイトル文字を表したものと、大きな壁面にそれぞれの趣向を凝らしたアイデアで、来場者の目を楽しませていた。佳作受賞者の展示作品もそれぞれにレベルが高く、展示されているブックを1ページずつ丹念に見入る来場者の姿が印象的だった。

2008年度グランプリを受賞した泰雅則氏の新作個展「幼稚な心」も同時開催。作者と同世代の男女を撮った作品を、アクリル板にはさんで天井から吊すという、意匠に富んだ展

示を行った。照明を落とした展示室に平行に吊された何枚ものアクリル板。作品に戸惑いながら近づいて見ると、そこに裸体の肖像写真が浮かび上がる。透明なアクリル板ゆえ、後ろの作品も連なって見え、不思議な奥行きに戸惑う。作品の意味、写真の意味、表現方法の深化を問いかけるような作品と展示だった。

近年の写真ブームもあってか、本展への感心も高く、延べ12,776名の来場者があった。また期間中には、泰氏、および優秀賞受賞者によるトークショーも開催され、熱心な写真談義が交わされた。



写真新世紀東京展の会場入り口



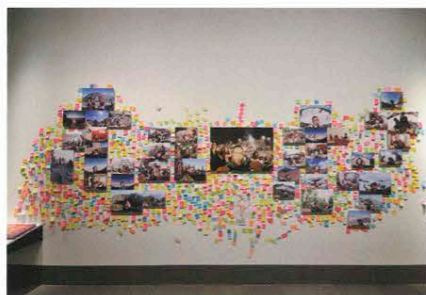
広いスペースに展示された優秀賞作品



グランプリ クロダミサト氏「He is ...」



優秀賞 Adam Hosmer氏「1/2」



優秀賞 杉山正直氏「オレハ・オララ」



優秀賞 高橋ひとみ氏「コロニー ※colony=繁殖のための群れ」



優秀賞 安森信氏「女性讃歌」



2008年度グランプリ受賞者 泰雅則氏「幼稚な心」



佳作作品の展示風景

## 2009年度(第32回公募)

レギュラー審査員：荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生  
ゲスト審査員：榎本 了彦 蛭川 実花

### 荒木 経惟 (あらかのふよし) 写真家

1940年生まれ。東京都出身。千葉大学工学部写真印刷工学科卒業。1964年「さっちゃん」で第一回太陽賞を受賞。1971年、新婚旅行を克明に写しとめた実質的な処女写真集「センチメンタルな旅」を自費出版し話題となる。作品のテーマは現実と虚構、愛と性、生と死などで、「私写真」という独自の世界を確立。常に先進的な方法論で社会の注目を集めてきた。これまでに発表してきた作品集は350冊以上にのぼり、2006年にはこれまでに発表した357冊すべての著作に、飯沢耕太郎氏による解説をつけた「荒木本! 1970-2005」(美術出版社)を発売した。また、近年開催された展覧会には、東京オペラシティアートギャラリーで森山大道氏とともに開催した「森山・新宿・荒木」展(2005)、ロンドンのパーピカン・アート・ギャラリーで開催した大規模個展「私・生・死」(2005秋~2006初頭)、東京江戸博物館において開催した「荒木経惟一東京人生一」(2006)や、2007年秋から2008年春にかけてローマにて開催した「アラキ・ゴールド」、そして2008年5月にベルリンのヤブランカ・ギャラリーにおいて開催した「荒木経惟 KINBAKU」、2009年10月に広島現代美術館開館20周年記念特別展として広島に暮らす住民の「顔」約450組を撮り下ろした「広島ノ顔」などがあり、国内外問わず精力的に活動している。

### 飯沢 耕太郎 (いざわ こうたろう) 写真評論家

1954年生まれ。宮城県出身。1977年日本大学芸術学部写真学科卒業。1984年筑波大学大学院芸術学専攻博士課程修了。1990年季刊写真誌「デジャヴ」を創刊、編集長となる(1994年1月まで)。日本写真史を中心にフィールドワークした活発な著作活動のほか、イラスト、コラージュなど写真評論以外の分野でも精力的な活動を展開している。2007年、コレクションをまとめた「世界のキノコ切手」(プチグラブプリッシング)を刊行した。ほか、近著として「写真について話そう」(2003 角

川書店)、「デジグラフィ」(2004 中央公論新社)、「ジャパニーズ・フォトグラファーズ」(2005 白水社)、「荒木本! 1970-2005」(2006 美術出版社)、「写真を愉しむ」(2007 岩波新書)、「増補版 戦後写真史ノート」(2008 岩波現代文庫)、写真表現の魅力と可能性を語る「写真的思考」(2009 河出ブックス)などがある。

### 南條 史生 (なんじょう ふみお) 森美術館館長

1949年生まれ。東京都出身。慶應義塾大学経済学部、文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。国際交流基金などを経て現職。これまでの主なプロジェクトとして、1997年第47回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、1998年ターナープライズ(英国)審査委員、第1回台北ビエンナーレコミッショナー、2000年シドニー・ビエンナーレ国際選考委員、ハノーバー国際博覧会日本館展示専門家、横浜トリエンナーレ2001アーティストック・ディレクター、2005年第51回ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞審査員、シンガポール・ビエンナーレ2006及び2008アーティストック・ディレクターなどを歴任。そのほかパブリックアート計画、コーポレートアート計画のコンサルタント、財団・基金などの選考委員、「アーティストインレジデンス」プロジェクトのアドバイザーとしても活動。2007年外務大臣表彰を受賞。

### 榎本 了彦 (えのもと りょういち) アートディレクター、クリエイティブディレクター、プロデューサー

1947年生まれ。東京都出身。武蔵野美術大学造形学部卒業。株式会社アタマト・インターナショナル代表。京造造形芸術大学教授・情報デザイン学科長。

1974年月刊「ビックリハウス」を創刊。以降、デザイン、編集、出版、文化イベントなどの仕事を展開する。1980年より「日本グラフィック展」「オブジェTOKYO展」「URBANART」などを1999年までプロデュース、1989年「世界デザイン博」住友館、「横浜博」広報・アートディレクション、1991年「日本文化デザイン会議・島

根」議長、2001年「うつくしま未来博」「なぜだろのミュージアム」(グッドデザイン賞受賞)展示演出、「九州博覧祭」「TOTOミラクルマジック館」(北九州市長賞受賞)、2002年丸ビル・オープニングイベント、2006年アートの情報サイト「コムコム.com」配信開始、2007年「黒川紀章キーワードライブ」(国立新美術館)企画、2008年「まつやまEPOX」(松山市)など、幅広くプロデュースしている。

主な著書に「アートウイルス」(1990 パルコ出版)、「アーバナーメモリアル」(2000 パルコ出版)、「榎本了彦のアイデアノート・脳業手技」(2000 マドラ出版)、「東京モンスターランド」(2009 晶文社)などがある。

### 蛭川 実花 (ひながわ みか) フォトグラファー

1996年度(第13回公募)写真新世紀において優秀賞を受賞した後、2001年「第26回 木村伊兵衛写真賞」等数々受賞。「花」「旅」「金魚」「人物」などを繰り返しテーマとして作品を発表し続ける一方、ファッション、広告、映画などの様々な分野をクロスオーバーしながら、現在最も注目を集めるフォトグラファーとして活躍中。

40冊以上の写真集を発表し、最新写真集は「FLOWER ADDICT」(2009 美術出版社)。また、個展も2004年に「mika over the rainbow」を東京、大阪、広島、名古屋、福岡で開催するなど、ベルリンやパリ、上海などでの海外開催も含めて、数多く開催。2007年に公開された映画「さくらん」では監督を務める。2008年11月に個展「蛭川実花展一地上の花、天上の色一」を東京オペラシティアートギャラリーで開催し、2009年に岩手県立美術館、鹿児島県霧島アートの森、西宮市大谷記念美術館、高知県立美術館で順次開催。東京オペラシティアートギャラリー、霧島アートの森では最多動員記録を更新。現在までに約16万人の動員を記録している(高知県立美術館を除く館の合計)。

URL: [www.tomiokoyamagallery.com](http://www.tomiokoyamagallery.com)  
(小山登美夫ギャラリー)  
<http://ninamika.com> (PC)  
<http://ninamika-m.com> (携帯)

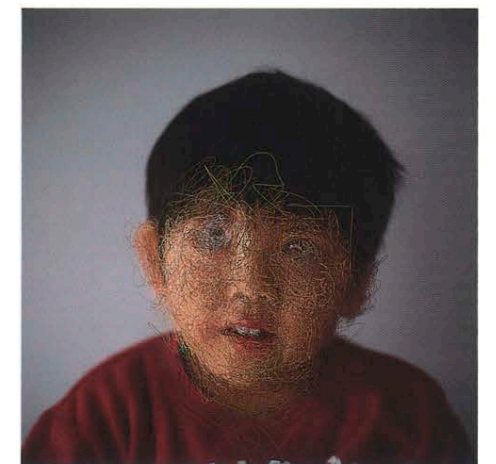
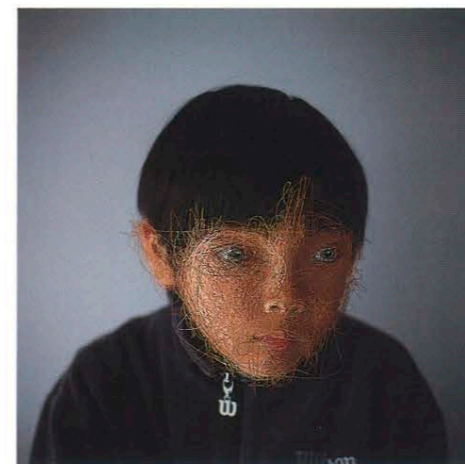
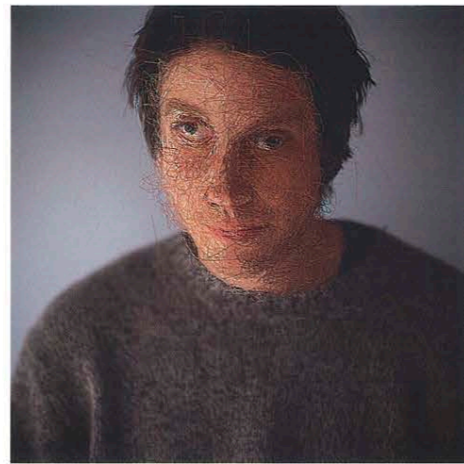
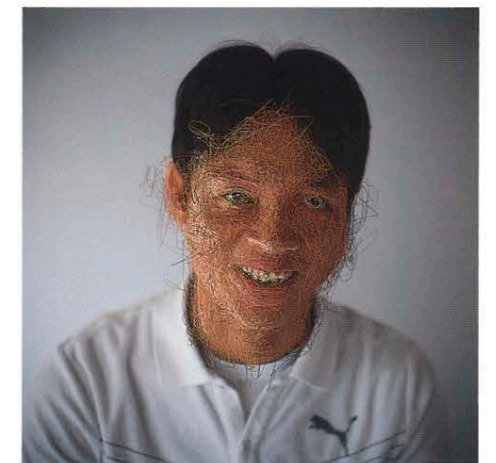
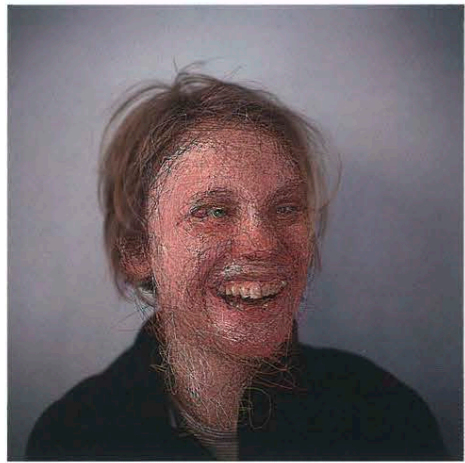
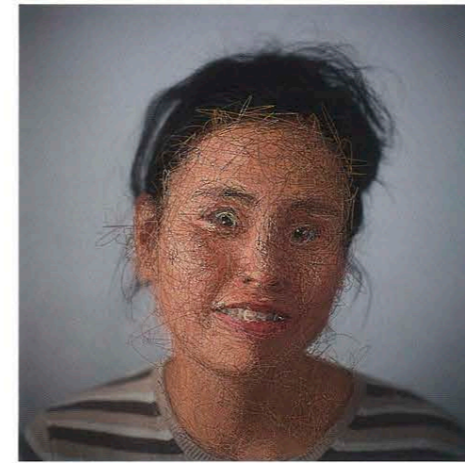
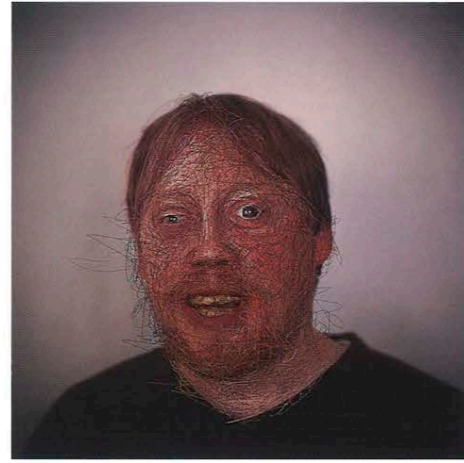
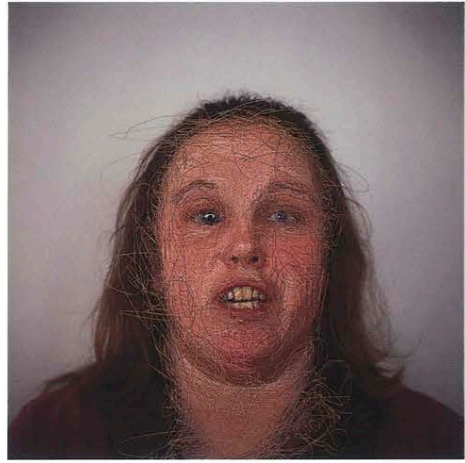
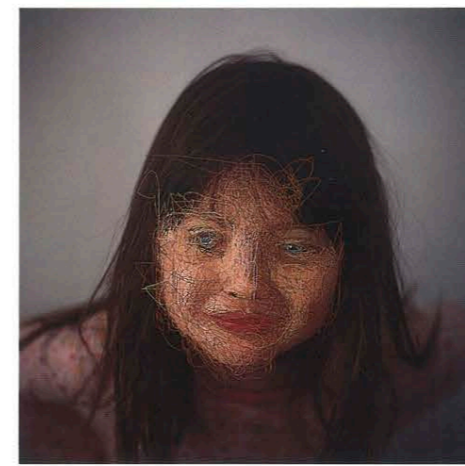
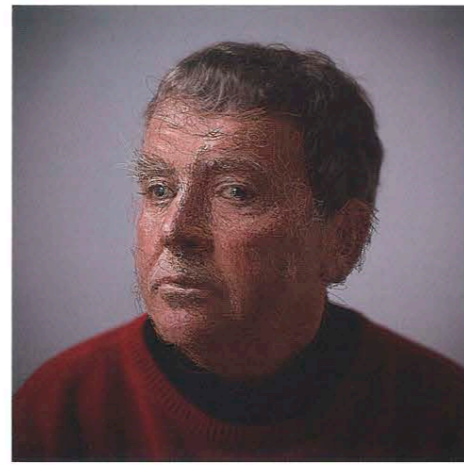
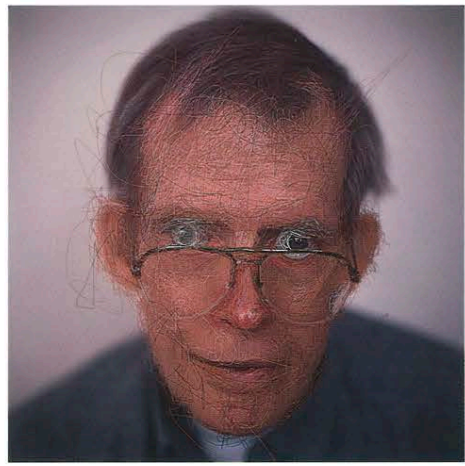


Adam Hosmer

「1/2」











Adam Hosmer アダム ホズマー  
「1/2」

プリント / A3ノビ / 19点 / インクジェットプリント / プレミアムマット用紙

**プロフィール**  
1977年 5月9日 米国・ボストン生まれ  
2001年 ニューイングランド音楽院 (New England Conservatory of Music) を卒業し、大阪で暮らし始める  
スタジオでカメラアシスタントを始める  
2007年 ミオ写真奨励賞2007 審査員特別賞 (選考:平木 取)  
2009年 フリーのカメラマンとなる

**個展**  
2006年 Elise Mankes Studio, ボストン, マサチューセッツ州, 米国  
2006年 119 Gallery, ロウエル, マサチューセッツ州, 米国  
2006年 Yellow Trailer Art Gallery, チェルシー, NY, 米国  
2007年 ビーツギャラリー, 大阪

**E-mail** westfordma1999@yahoo.co.jp

#### 受賞者コメント

この一年は少しデジタル対アナログの話が少なくなったような気がします。それは本当に意味があるかどうかかわからないですけど、たぶんデジタルの時代に入っているというのは普通に認められるようになったのかもかもしれません。しかし、デジタル写真に対しての一番大きな問題は、リタッチする時、何ができると考えたら、その可能性があまりにも凄くて、元の写真の良さが消える事もあります。このシリーズは僕にとって、長いプロセスからの一つのアイデアです。元の写真を崩してしましますが、どうかその元の良さを残したい。人の写真を撮るのが好きですが、やっぱり人物を撮っていると、その人が何かを与えてくれている訳ですから、それを大切にしたい。ぱっとみた感じはそう思わないかもしれませんが。そして撮られている人は一人も気に入ってくれないですけど、仕方ありません。

#### 選：南條 史生

この作品は、人間の実存という問題を考えさせる。ジャコメッティやフランシス・ベーコンといった作家に通じるところがある。体が崩壊していくようなイメージの作り方は、人間の存在に対する疑問があるのではないか。顔を傷つけるのは暴力的だし、認識自体の崩壊がそこに起こっていると言える。一方で、ポートレートの目の部分は異常に強い。その目の強さが作品の強さにつながっている。単に誰かのポートレートを撮ったというより、普遍的な存在としての人間を描こうとした作品を感じる。

2009年度(第32回公募) 優秀賞

## Adam Hosmer インタビュー

アメリカで生まれ育ち、現在は大阪市内で暮らすAdam Hosmer氏。コマーシャルフォトの仕事しながら制作した作品が、優秀賞を受賞。アイデンティティの問題をテーマにしたという作品が誕生する、そのいきさつを語った。

インタビュー・文＝鳥原 学

### 本当の世界を感じたかった

#### アメリカのどちらで育たれたのですか？

東海岸のマサチューセッツ州、ボストンです。教育に熱心な町です。みんな家を買うことや結婚することを目的に暮らしているようなところで、どこか虚像の世界みたいでした。それで、国を出て本当の世界を感じたいと思い、14年前に高校を卒業して1年間の世界を回る旅に出たんです。

#### 世界中を回ったのですか？

当時はどこまで飛んでもOK、というチケットをユナイテッド航空が20万円で作っていて、世界の4カ所を3カ月ずつ滞在する旅に出ました。働く代わりに食べるところを用意してくれる場所を見つけて、アラスカでは犬ぞりの犬の世話をし、南フランスでは絵を描くアーティストの手伝いをしました。それからネパールと日本。日本では北海道に行ったんですが、小樽から舞鶴へ30時間かかって行くフェリーの中で妻と出会いました。

#### その後、ご結婚されたのですね。日本に来られたのはなぜですか？

世界一周の旅からアメリカに戻って音楽大学へ進んだんですが、日本で妻の家族とカラオケに行ったときに聞いた奥田民生の音楽が好きになったんです。日本で音楽をやりたいと思って2001年から住み始めました。途中で子どもが生まれたので、2005年にアメリカに一度戻って1年半後にまた日本に。

#### 写真を始めたきっかけは何だったのですか？

6～7年前からアクリル絵の具で絵を描いていたんですが、何か月もかかって完成させる

のに好きな絵ができなかった。それでモデルを呼んで写真を撮り、その写真を元に絵を描くようになったのですが、写真をPhotoshopで編集しているうちに、写真のおもしろさに惹かれたんです。プロになるには学校へ行かないといけないと思っていたら、アシスタントとして勉強しながら仕事ができることがわかった。それでコマーシャル写真のスタジオでアシスタントをするようになったんです。

#### アイデンティティをテーマに

#### アシスタントを始めた2007年に、ミオ写真奨励賞で審査員特別賞を受賞されています。これはどんな作品ですか？

「私が日本人になった場合」というセルフポートレートです。日本に住んでいると、自分のアイデンティティについて考えてしまう。白人ばかりの街で育ったのに、日本に来ると自分がマイノリティとして特別な存在になる。外見でいろいろ思われるのがおもしろいと思って、女子高生や自転車に乗ったおばちゃんに格好をしました。

#### 今回の「1/2」(ハーフ)という作品は、どういう人をお撮りになったのですか？

家族だけです。妹や妹の子供、父と母、それに自分の子供とか。実家の家族は去年のクリスマスにアメリカへ戻ったときに撮りました。顔をPhotoshopで崩しているので、そういうことをしても許してくれるのは家族だけかなと思うから。ハーフというテーマが出てきたのは、自分の子供がアメリカ人と日本人のハーフだから。それに、写真を加工するので、デジタルとアナログのハーフでもある。タイトルには、いろいろな意味のハーフが入っています。

#### なぜ、このように顔を崩したのですか？

以前から、Photoshopで写真をいじることはやっていたんですが、カメラマンの仕事を始めたら写真らしさを残したいと思うようになった。写真は絵と違い、撮った瞬間があって、ゼロからではなく作ることができる。まず何枚も撮って、一番その人らしさが出ているような写真を選ぶ。それから写真の顔をつぶす。でも、元の写真の要素はけっこう残っている作品なんです。つまり、問題にしているのはアイデンティティの問題です。ストレートな写真だと、外国人だとか、年齢とか、インテリっぽいか、いろいろ見えてしまう。それを、これは誰だろうという謎のものを作りたいと思ったんです。

#### 印象的なのは眼の部分だと思いますが、

眼を触らなかつたら、抽象的じゃなくなってしまいます。ポートレートを見たとき、もっとも視線が行くのは眼の部分です。だから、ある程度眼をつぶして、人間だけ人間っぽくなく。

#### 南條さんが、「人のポートレートではなく、普遍的な存在としての人間を描こうとしている」と評価していらっしゃいました。この作品は、どのように展示されるのですか？

画面で見たらきれいだと思うんですよ。だから、モニターとプリントアウトと一緒に展示したい。プリントは大きく引き伸ばして、僕が使える5メートルの壁面全部を使うつもりです。大きくするとインパクトが違う。展示をするときは、インスタレーションみたいな感じで。わざわざ美術館に来た人に、何かを経験してもらいたいと思っています。

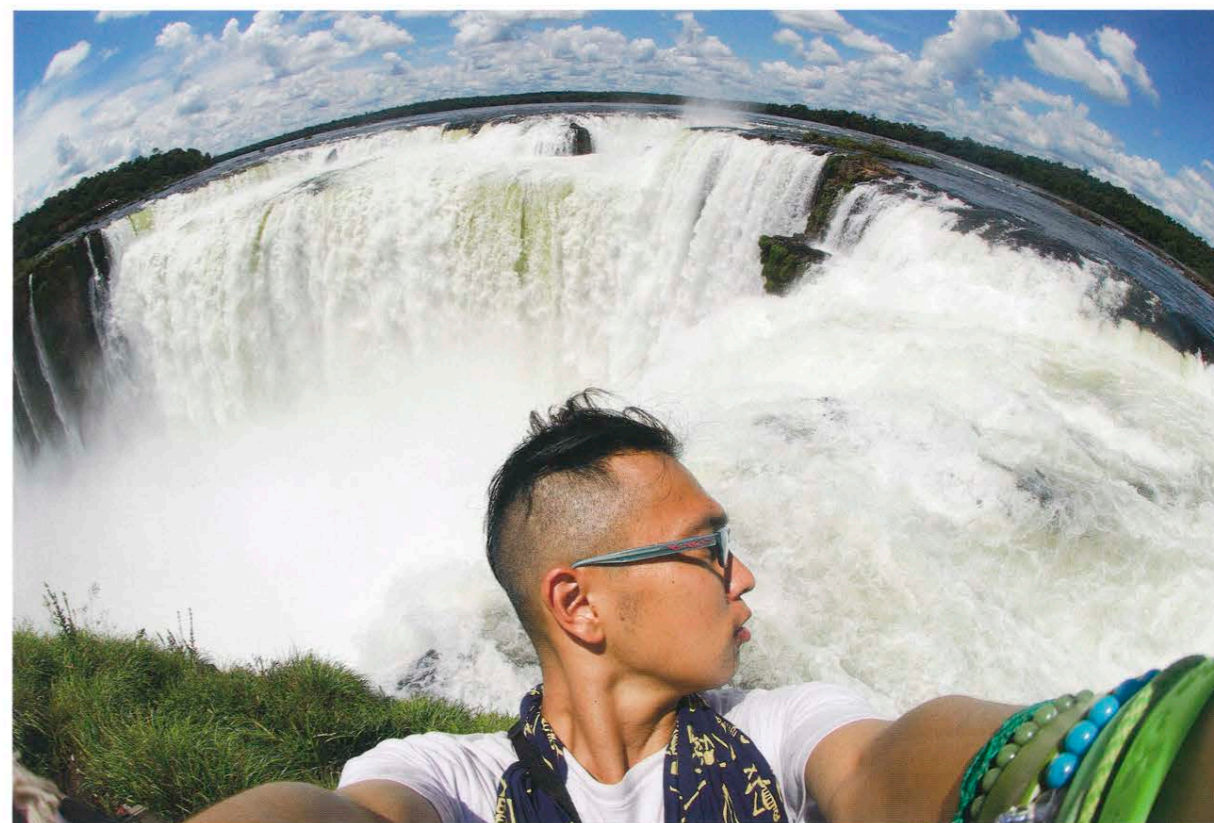
(2009年10月2日)



2009年度(第32回公募) 優秀賞 榎本了彦選  
杉山 正直  
「オレハ・オララ」



旅立つ前日、  
うどん(手打)を作ってみた。  
皆「Que rico!」と言った。



アルゼンチン側です







# 極めて腕白!!!

## 30歳。

### 杉山正直。



#### 受賞者コメント

私は「写真」が好きです。それは単に「撮る」とか「見る」とか行為だけでなく私が「写真」というモノに関わっている事によって展開して繰り広げられているこの人間生活自体が大好きだという事です。中途半端な旅をしていたのだと思う、これまで。30歳になった時、リオのカーニバルが見たいと思った。ん?と調べてみると篠山紀信は30歳の時に「オレレ・オララ」を撮っていた。それを知ったとき次は中途半端な旅をしないようにしようと思いながらブラジルへ向かった。約8カ月間、中南米ではしゃいだ。変わりゆく背景達、その中に確かにオレはそこにいた。その証明として写真を撮った、撮り続けた。

今回の受賞で私の周りで私の事をただ単にふらっと旅に出たがるオッサンだと思っていた人々が「そうじゃないんだ!」と思ってくれたならなんか嬉しいです。

この写真達を一応オマージュとして我が師にも捧げておきます。

#### 選：榎本 了希

世界中を旅行してセルフポートレート撮っているということなんだけれども、単なる観光写真じゃなくて、その場や地域とのコミュニケーションが良くできている。セルフポートレートでありながら、世界を記述し自分との関わりを残していくという、ある種のパフォーマンスとしても写真を楽しんでいます。スタティックなものを見つめるという態度ではなく、写真でプレイするというのかな、写真と一緒に旅行しているという楽しさがある、開かれた感じでカメラというメディアを使っているのに共感しますね。暗い世の中で明るい写真で気持ちいい。



杉山 正直 すぎやま まさなお  
「オレハ・オララ」

ブック/A3 / 142ページ/インクジェットプリント

#### プロフィール

1977年 9月15日 愛知県名古屋生まれ、小牧市育ち  
2000年 7月21日 有限会社六本木スタジオ入社  
2003年 3月31日 株式会社篠山紀信入社  
2005年 4月 1日 フリーダム開始  
現在「写真」と言うモノに関わっていられたらいいなあと思っています。

E-mail wakadorino@yahoo.co.jp

2009年度(第32回公募) 優秀賞

## 杉山 正直 インタビュー

初応募で見事に優秀賞を受賞した杉山正直氏。

中南米を回って撮った、旅の高揚感が伝わってくるセルフポートレートの発想はどこから来たのか。篠山紀信事務所などで修業を積んできたという氏の、作品誕生に至るまでの話を聞いた。

インタビュー・文=鳥原 学

#### セルフポートレートで得た手応え

セルフポートレートの「オレハ・オララ」を撮影したきっかけは何ですか?

以前から、ふらっと東南アジアやインドは旅してきたんですが、ただ旅を楽しんでスナップを撮るだけじゃなく、一貫したテーマのある写真を撮りたいと思ったんです。

旅は2008年1月21日から9月18日まで8カ月間、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルーなど中南米を12カ国回りました。最初はリオのカーニバルを見たいと思って、あとは流れるままに。何カ月いるとか、どこに何日滞在するとか決めずに行くんです。今回は思ったより長くなりました。

自分を作品に写し込むようになったのは、旅の風景と一緒に自分も写りたいと思ったから。他の人に頼むと、すぐへたくそな写真を撮られることがあるので、それなら自分で撮ろうと。いろいろなやり方を試すうちに「こうだ」と思ったのが、ポートフォリオの最初にある写真です。でも、自分が正面を向くと、自分の後ろに壁ができる気がしたんです。写真を見る人が、写っている僕の表情を気にし過ぎてしまいますね。

応募されたポートフォリオには、何点入っているのですか?

200枚くらい撮った中から、71枚が入っています。僕自身の思い入れの度合いと、写真的にきちんと収まっているかどうかを基準に選びました。一応、場面を選んで撮るんですが、セルフポートレートだと、その瞬間に確信を持って。だから祈るような気持ちで撮っています。スナップ写真も同時並行で撮っていますが、セルフポートレートのほうが楽しかったですね。旅の途中で、写真を確認してはいたんですが、

ある程度の数貯まってきたときに、これはおもしろくなってきたなと。それで、帰国してから写真新世紀への応募を決めました。

旅の魅力って、どういうところでしょう?

不便さと、それが解消されたときの快感でしょうね。たとえば、ブラジルはポルトガル語圏ですが、中南米の他の国はスペイン語圏。英語も通じないんです。しゃべれなくてイライラが募るんだけど、結局言語なんて関係なく、意志が通じてみんなで楽しく盛り上がる。一緒に飲んだり、パーティーに呼ばれたりして仲良くなれる。

そういえば、カーニバルの途中でカメラをぶら下げた状態で5~6人の団体に引っ張られて「やばい」と警戒しながら連れてかれたら、「飲め」と。出されたお酒をガッツと飲んだら、「OK、OK、じゃあね」と解放され、カメラを盗もうとしたんじゃないんだと安心した。僕は日本では人見知りなんで、あまりしゃべれない。でも、旅をしていると、最初は恥ずかしいんだけど、だんだん馴染んで溶けこんでしまうのが楽しい。

#### 篠山紀信事務所 で積んだ経験

杉山さんは篠山紀信事務所におられた。篠山さんは、すごいスランプの時期にリオのカーニバル取材してスランプを解消します。そして発表した「オレレ・オララ」が30歳のときの記念碑的な作品となった。師匠のことは意識されますか?

僕もこの間30歳になりました。リオのカーニバルに行きたいと思ったときに、「オレレ・オララ」は頭に浮かびましたね。偶然のシンクロなんだけど、僕自身も危機感がありました。カメラマンとして仕事はしているけれど、

周囲からは単なる旅好きのおっさんと思われているだろうと。

篠山さんは、杉山さんにとって、どういう存在ですか?

「写真はすごい」ということを単純に教えてくれた人です。

僕は大学で写真部に入っていたんですが就職活動をしなかった。一方で写真がおもしろかったから、じゃあ写真かなと。お金を払って学ぶより、お金をもらって学ぼうと写真スタジオに就職しました。そこを3年間勤めて辞めようと思ったとき、たまたま篠山紀信事務所のアシスタントの空きができて、知り合いのカメラマンが僕を紹介してくれたんです。

篠山さんに付いているとき思い感じたことは、篠山さんにとって写真はライフスタイルなのかということ。撮る瞬間とかそれまでの準備が写真なのではなくて、一貫した暮らしそのものが写真につながるんです。たとえば僕が篠山さんを乗せて車を運転している間も、ひたすら写真について考えているんですよ。この人はたぶん、寝る寸前まで写真のことを考えているんだろうなと思いました。

僕にはそれは無理なので、なるべく違う特性で自分のスタイルを作り上げたいと思います。人を自然に撮れたらいいなと。その人にとって一番いい顔をしているのは、自然にしているときだと思いますから。

今回の作品で一番伝えたいことは何ですか?

旅は楽しいということ。それから、この写真は、見たら気分が明るくなるような写真だと思うんですが、僕の気持ちを込めてとかそういうのではなくて、観た人が単純に元気になってほしいですね。(2009年9月29日)

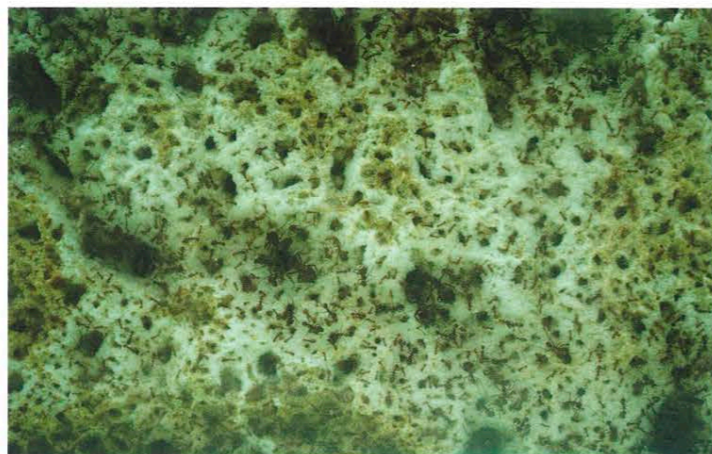
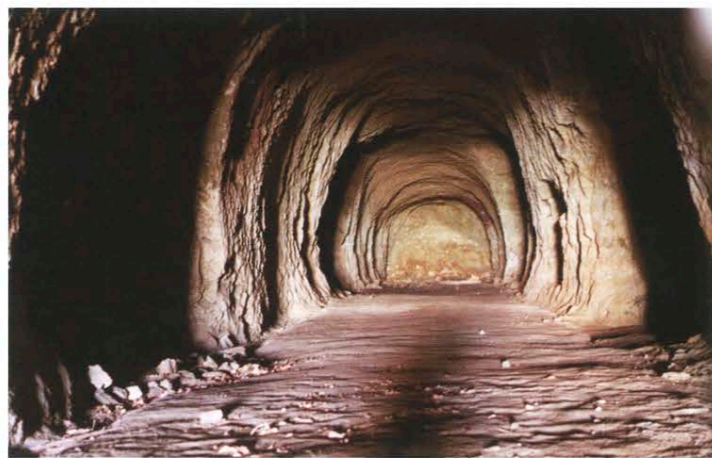
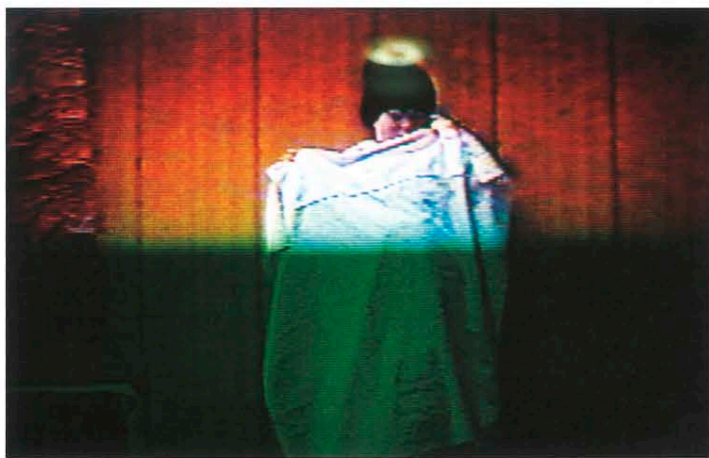


高橋 ひとみ

「コロニー ※colony=繁殖のための群れ」











#### 受賞者コメント

「コロニー ※colony=繁殖のための群れ」

わたしが 生まれると、 あい犬のピッコロは いつも わたしのかおを 世話するようになてきた。

じぶんのからだが 大きく なるほど、 庭の うすぐらい犬小屋の なかを のぞきたくて たまらなくなった。

じぶんの周囲に森の出現をそうぞうする。  
森のなかは光をよりいっそうつよくし、もっともふかい影をおとす。  
昼夜のべつなく、動物はずかしく森にまぎれている。  
むかしむかし・あるところの日本。

コロニーは「だらけ」の世界だ。  
ムカデだらけ、イヌだらけ、スズメだらけ、だらけだらけ。  
そんなものこそ自然のさまに思える。  
湿気ったらしく息がしやすい。

#### 選：飯沢 耕太郎

プライベートビデオやアルバムに貼ってある過去の自分を拾いながら、今の自分のあり方とつなげて、未来の自分を見通そうとしている。自分に対する違和感とかズレみたいなものを、過去と現在、未来を通す形に手探りで縫い合わせているところに、切実さとリアリティーを感じます。写真のつなぎ方が独特で見ているほうにはやや分からない部分もあるが、高度なつなぎ方をしてる。ちょっと残念なのが、まだ自分の問題で自足して社会に向けてつなげていく視点がでていないこと。どんどん成長していくことを期待しています。



高橋ひとみ たかはし ひとみ

「コロニー ※colony=繁殖のための群れ」

ブック/大四切/56ページ/カラー印画紙

プロフィール  
1988年 11月20日 茨城県生まれ  
2009年 早稲田大学芸術学校空間映像科写真専攻卒業

2009年度(第32回公募) 優秀賞

## 高橋ひとみ インタビュー

高橋ひとみ氏は、早稲田大学芸術学校空間映像科を今年卒業したばかりの20歳。「20歳でこの構成力はすごい」というのが飯沢耕太郎氏が優秀賞に選んだ理由だ。子どもの頃の記憶を呼び覚ます作品「コロニー ※colony=繁殖のための群れ」誕生のいきさつを聞いた。

インタビュー・文=鳥原 学

### 子どもの頃の記憶が出発点

おめでとうございます。優秀賞の一報を受けて、どういう感想を持ちましたか？

応募したことで満足していたので、本当に信じられませんでした。作品が返ってきたらどう直そうかと思っていたぐらいです。日々、撮り続けていて、「コロニー」はその後50枚ぐらいたまっています。

### 作品のコンセプトを教えてください

学校の卒業制作として、1年半ぐらい前から撮り始めていました。タイトルは家にあった動物図鑑から。図鑑を開いたら家族の誰かが「コロニー」という単語に鉛筆で印をつけていて、この言葉に惹かれてシリーズをまとめようと。コロニーとは生態学の用語で「繁殖のための群れ」という意味があるのですが、その群れの中で、息をしたいと思う自分がいるように思えたんです。

私は3人姉妹の末っ子で、姉2人が仲よかったんですが、いつも私は置いてけぼり。飼っていたピッコロという柴犬に世話をされるように育った記憶があって、今でも特に大きな動物を見ると「親離れしたくない」という気持ちが出てきます。ひとつのコンプレックスですね。

### 早稲田大学芸術学校空間映像科に入学して、写真を選ばれたのはなぜですか？

高校2年生のときに早稲田の映像ワークショップに参加し、教授の藪野健さんと准教授の佐藤洋一さんに会ったことが決定的でした。早稲田のまわりで1分間の映像を撮ってくるという内容だったのですが、私の映像を「世界に羽ばたけると」すごく褒めてくださった。先生は私だけじゃなく、みんなに言ってい

るんですが(笑)。

ムービーで撮られた昔の映像を引用する発想はどこから得たのですか？

家には家族を撮ったビデオが1本しかないんです。それを約10年ぶりに見たときに、ピッコロがカメラに寄ってくる映像があって「懐かしいな」と思って何回もリピートしていたら、テープが傷んできたんです。何とか残しておきたいと、半ベソをかきながら再生画面を撮ったのが最初でした。夜中にリビングのテレビに向かって三脚を立て、写真を撮っている自分の行為は痛々しいけれど、嫌いじゃないです。テレビ画面を、アナログカメラでパシャッと撮る行為自体も好きなんです。

ほかに、姉が七五三のときの映像を撮ったりしています。姉ばかりが撮られるので、カメラの下に隠れて姉が撮られる瞬間に「わあ!」と出て邪魔したときのものです。当時の感覚や記憶が今でも残っているのですが、それを作品につなげて昇華させたい。

最近はビデオカメラで映像を撮り、それをテレビで再生したものを撮った写真も多いんです。たとえば、魔女の真似をして箒をまたぎながらジャンプをしているところを映像に撮り、ジャンプをする瞬間を静止して写真に撮るとか。このときは、小さい頃にジャンプばかりしていたことを思い出して撮りました。

写真を始める前の生活は、毎日が演技をしているような感じで、あまり思い出したくありません。急に落ち込んで学校をさぼったこともあります。でも、昔の映像や写真を複写していると、嫌いだった過去を笑いに変えられるような気がします。姉が映像に写るのを邪魔していた自分も、写真にしてみると、肯定できるような気がします。

### 自分を通して、社会の問題と関わりたい

シリーズを作り始めて1年半の間に、作品はどう変わってきましたか？

初めはスナップ写真も混ぜていたんですが、複写したものが中心になってきて、最近はこのシリーズだけです。両親の結婚式の映像も入っています。この作品を見て、入学以来今もお世話になっている鷹野隆大先生からは、「映画『呪怨』の世界だ。怖いね」と言われました(笑)。写真を選んでいくうちに、自分の中で物語が出てくるので、そのつながりで構成してみる。すごく単純な短編の物語をつなげて編集する感覚です。

飯沢さんは高橋さんの作品を、自分の現在や未来を過去の映像から読み解いていくようなところがある。ただ、その未来がどう社会と結びついていくんだろう、とおっしゃっています。

学校は夜間の専門学校なので、大学生や社会人など、いろいろな年齢の人がいました。そういう人たちは、今の現実や社会の問題を自分の中で消化して作品を作ることができます。でもそういった経験のない私が「それは私には分からない」と開き直って遮断して作ったのがこの作品。そうすることで初めて積極的に外の世界と関わった、という意識が表れました。子ども時代のコンプレックスなどは、大きな問題ではないかもしれないけれど、社会の中で何人か、あるいは誰もが必ず抱えているはずなので、それを形にできればと思っています。

卒業制作展でこの作品を低い高さに展示したら、小さい女の子が写真に顔を近づけてすごく嬉しそうに観ていた。このシリーズは、子どもが見やすい位置に展示したいと思っています。(2009年9月29日)



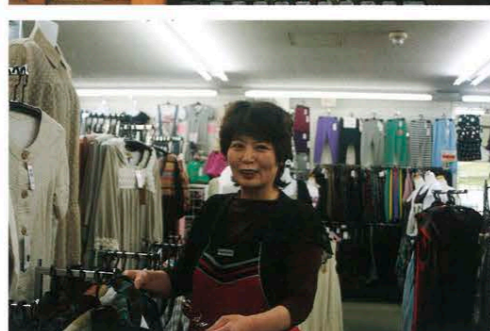
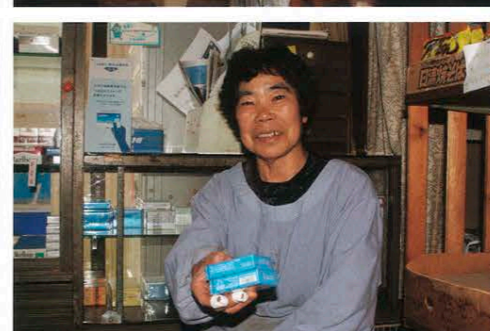
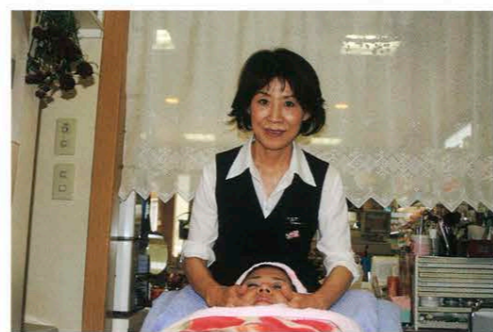
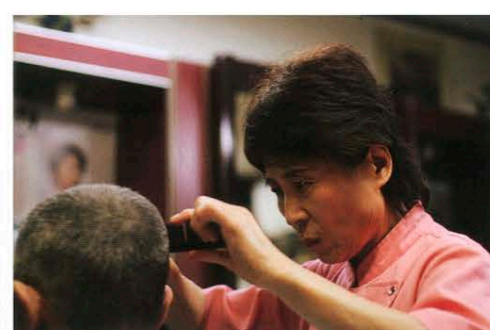
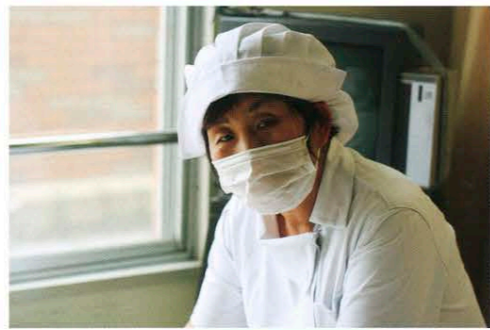
2009年度(第32回公募) 優秀賞 荒木 経惟 選

安森 信

「女性讃歌」











**安森 信** やすもり まこと  
「女性讃歌」

プリント／全紙／30点／カラー印画紙  
ブック／A4／30ページ

**プロフィール**  
1977年 6月3日 山口県生まれ  
1999年 日本写真映像専門学校研究科卒業  
2003年 第4回上野彦馬賞-九州産業大学フォト  
コンテスト-日本写真芸術学会奨励賞受賞

E-mail htc07734@hotmail.com  
URL http://ameblo.jp/makoto-photo

#### 受賞者コメント

この作品に登場するのは60歳以上の働く女性達。  
制作のキッカケは、パートとして昨年まで働いていた自分の母親が離職した時に抱いた「働く姿を撮っておけばよかった…」という後悔の念からです。それまでずっと作品のコンセプトを考えていた僕は、この時、母親と同じ60代以上でハツラツと働く女性達が身近なところにいるのに気づき、撮影を開始しました。出会ったのは、僕の持っていた「60歳＝定年退職＝現役引退」という概念を打ち破るバイタリティーあふれる面々。勤続年数は、ほとんどが数十年以上。理由を聞くと、「生活のためよ」なんて言われました。しかし、彼女達は仕事を楽しんでいます。それがしっかりと伝わってきました。母であり、職業人であり、そして、何よりも女性である。その“生きざま”が刻まれた表情に、一心にカメラを向けました。

#### 選：荒木 経惟

いいじゃない、これ。頑張ってるよ。幸せなことを撮るとか、撮ることで幸せにするとか、そういう気持ちがあるでしょ。人生の楽しい時とか、いい時を撮るとするのがいい。生に光をあててるでしょ、これは写真の基本なんだよ。この作品、写真としてはなんでもないんだ。うまくもない。だけど、写真を感じさせないというか、アートっぽく作ったり、表現しようとしたりしていないのがいい。被写体が表現しているのを素直に複写している。撮る人が被写体に嫌われてないでしょ。その関係がいいよね。

2009年度(第32回公募) 優秀賞

## 安森 信 インタビュー

生まれ育った山口県長門市で暮らしながら、  
地元で生きる60歳以上の女性たちの働く姿を収めた30枚の写真「女性讃歌」で、荒木さん選の優秀賞受賞。  
実は荒木経惟の大ファンという安森信氏。この作品を撮った動機と写真への思いとは。

インタビュー・文＝鳥原 学

### 地元ケーブルテレビ局で積んだ経験

写真を始めたきっかけを教えてください。

高校生の頃、芸人のダウンタウンに憧れてお笑いの道へ進もうと、大阪まで行ってNSC(吉本総合芸能学院)のパンフレットをもらってきたんです。ところが、母親から「頼むから専門学校までは卒業して」と言われて断念。それで選んだのが、大阪にある日本写真映像専門学校だったんです。梅佳代さんや浅田政志さんが出た学校で自由な校風でした。

お笑いに憧れるほどテレビが好きだったので、映像学科で映像を学びました。そこで1年生のときに「映像の基本は写真だ」ということで、スナップ写真を撮って現像してプリントする、という授業があった。暗室で像が浮かび上がったときにおもしろいと感じて、写真を撮り始めました。

学校を卒業してからは、どのように過ごしてこられたのでしょうか。

東京都内にある大きな広告写真のスタジオに1年弱勤めました。ポートレートもあると聞いて入ったんですが、朝から深夜まで1日中、ブツ撮りばかりする毎日で、睡眠時間は2～3時間しかなかった。体力がもたないし、これでは気が狂いそうだと思って辞め、山口の実家に帰りました。

親からお金を出してもらって学校へ行ったのに関係ない仕事をするのも、と思っていたところへ、地元のケーブルテレビ局の求人があったので1999年に入社しました。仕事は撮影から編集、ニュース記事まですべてをやるんです。いい経験をさせていただいたと思っています。

### 輝いている人を撮りたい

2003年に上野彦馬賞の公募で日本写真芸術学会奨励賞を受賞されています。こうした公募展には、かなり応募しておられたのですか？

はい。写真新世紀の応募も5回目です。去年は、人が幸せそうな表情だけの写真でした。

今回の作品で荒木さんが一番評価をされたのは、人に対して非常に愛情を持って、美しく輝いている顔を撮っているという点でした。

暗いところばかりを撮るより、よいところを撮りたいですから。今回の「女性讃歌」も、60歳を過ぎてても現役でいる人はカッコいいと思って働いている女性を撮り始めました。最初は、良く出入りするホテルのラウンジで働く60代の女性に「写真を撮らせてもらえませんか」と頼みました。

ご本人は、作品をご覧になっているのですか？

はい。デジタルなので撮影したカットを見せてコミュニケーションを図ります。ラウンジで撮らせてもらったんですが、「タバコを吸ってみたらいいんじゃないかな」とか、塩コショウを入れる程度の演出も入れながら、すんなり撮れました。

なぜ被写体は30人なのですか？

全紙サイズに引き伸ばすと決めていたので、展示した時にバツと一望できるのは、30枚が限度かなと。それで30人を撮りました。相手が女性なので、口説き落とすような感じで撮っていますね。

写真を撮りながら、その人が歩んできた人生などを聞いたりするのですか？

聞きますね。例えば60歳ぐらいのトリマー

の方は、外国の映画で女性がトリマーをやっている姿を見たことで、その仕事に憧れて上京したとか。当時、女性のトリマーはいなくて男性の方に弟子入りをしたそうです。1日も休みがなく、家でガス爆発が起きた直後も包帯を巻いて行ったとか。美空ひばりさんや大きな建設会社の社長のペットも担当していたそうです。人口4万人しかない長門の町にもこんな凄い人がいるんだと驚きました。

これからのご予定は？

実は今年3月でケーブルテレビ局を辞めたんです。この作品を撮り出した2月頃から、作家としていけそうだと自信も少しありまして、作品づくりに専念したいと。ケーブルテレビ局を飛び出してしまうないと、そのまま埋もれてしまいそうな気がしたんですね。

目標にしている作家はいらっしゃるのですか？

欲を言えば荒木さん。一番好きな作家なんです。今回は荒木さんに選んでいただけてうれしかったです。20歳の頃、『センチメンタルな旅・冬の旅』(新潮社)を見て涙が出てきたんです。それまではエロの写真家というイメージだったんですが、すぐ愛情があふれる人なんだと思いました。

これからの展開について教えてください。

売り込むときはちゃんと売り込んでいこうと。それから忘れられないように作品を作り続けたいです。今は、長門の観光ホテルの従業員の方を撮ったりして地元の新聞で連載しています。それから、10歳から10歳、10歳から20歳と、各世代の女性たちに好きなことをしてもらって撮影する「女性鑑賞」というシリーズを撮り始めています。いずれは、世界で展示される作家になりたいと思っています。(2009年9月29日)





生島 俊介 いくしましゅんすけ  
「みんなやってるよ」  
ブック/A3/63ページ/インクジェットプリント

「とくに動物好きというわけでもなかった父親が、ある日突然ホームセンターでうさぎを買ってきたときの話です。」

選：飯沢 耕太郎  
「わりと最近よくある、少し距離を置いた日常スナップなんだけど、何枚かすごくおもしろい写真があった。ココアが流れる写真は、よくできた偶然のアートになっている。ピンクのリコーダーもいい。そういうものを見つける観察力や世界の切り取り方がおもしろい。ただ全体として見ていると、予想がついてしまう。もう少し絞り込んでバージョンアップすると何か出てくる気がする。」



岩瀬 菜美 いわせなみ  
「夜流の声」  
プリント/半切/50点

「ご覧いただいた方、撮らせていただいた方、ありがとうございました。」

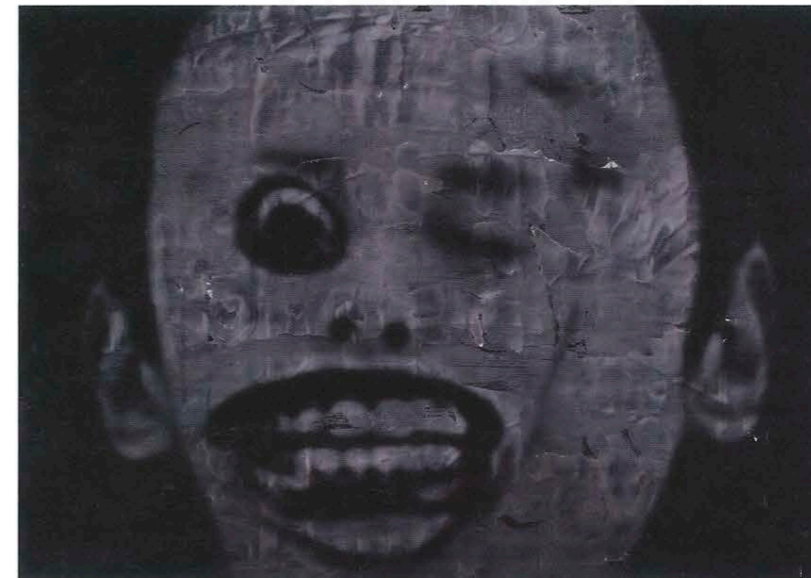
選：荒木 経惟  
「最近少なくなった写真の古典のような、「声をかけて撮らせてもらう」スナップだね。みんな忘れちゃっているんだよね、この基本をさ。いいよ、すぐちゃんと撮っていて、頑張ってるよ。ただ、女は暗い、人生は暗いと思ってる感じがするのが気になる。先入観で「こういう人にしちゃおう」って思っているところがね。」



池田 衆 いけだしゅう  
「a faint smell of memory」  
パネル/1,190mm x 890mm/1点/コラージュ

「常に一瞬である光、植物、空間を一つ一つ切り取ることは、刻一刻と過ぎてゆく時間と対峙することを意識してしまいます。」

選：南條 史生  
「切り絵が非常にうまい。撮られた写真のイメージをカットアウトして作られたイメージが、こんな風に絡みながらうまくいくというのは、ちょっと神業に近い。この一点はすごくうまくいっているけれど、他の作品はどうだろうというのが気になる。濃厚な主題があるわけではないが、つい見てしまうんじゃないかな。日本の花鳥風月を愛でたり、工芸を作る伝統とつながっている感じがする。」



大川 正太 おおかわしょうた  
「シンメトリーとフィクションという」  
パネル/1,030mm x 728mm/8点/インクジェットプリント、アクリルエマルジョン、ジェッソ

「この作品はポップ=大衆→個への移行→脱個性という「現在」に対する私の解釈でもあり、ただの物体でもあります。」

URL <http://www.shotaohkawa.com>  
E-mail [shota.ohkawa@gmail.com](mailto:shota.ohkawa@gmail.com)

選：南條 史生  
「人間を闇の世界から見ているような、悪魔的なものを感じる。一見平板に見える写真だが、テーマと素材の両面にレイヤーがある。見て単純に分かるのではなく、強烈な不可解さを内包したイメージだ。」

選：榎本 了吉  
「カメラの形跡はディテールしか残っていない、どこまでが写真なのかわからないおもしろさ。アナログ的な仕上げが功を奏しています。イラストレーションとしても評価できるし、画面の構成力もあります。」





**キリコ**  
「旦那 is ニート」

ブック/A4 / 48ページ/インクジェットプリント

「受賞してからある理由で作品にモザイクを加えましたが、そのある理由も含めてのプライベートドキュメンタリーです。」

選：荒木 経惟

「おかしいねー。おもしろい！ 現代を捉える。写真に添えられた説明文を読まないでちょっとわからないんだけど、文章とのコラボレーションも、写真のひとつの提示の仕方なんだよね。挑戦してるなあ。奥さんが偉いよ、すっからかんのニートになっちゃった旦那を気遣ってあげている。生に向かっている、と信じたい。しかし、笑っちゃうよ。」



**杉本 智美** すぎもとともみ  
「タンタン —there are seven days in a week—」

ブック/B4 / 84ページ

「認知症のおばあちゃん達と過ごした一年。色んなことがありましたが、自分が助けているのではなく教えられていると実感している。ありがとう。」

選：蛸川 実花

「写真は被写体の魅力がとても重要なんです。私の好みでもあるんですが、その写っている人やものの魅力を最大限に引き出すのが、写真のひとつの形なんじゃないでしょうか。この作品は写っている人のキャラクターの強さやおもしろさが引き出されていて、何回も何回も見てしまいますね。楽しそうに撮っていて、またおばあちゃんも楽しそうに写っていて、嫌みがなく好きです。」



**齋藤 陽道** さいとう はるみち  
「タイヤ」

ブック/A3ノビ / 24ページ

「ずどどと駆けてゆくタイヤを見る。カッコイイッ!と頬赤らめてフラッシュ。これは恋?愛?。」

URL <http://www.saitoharumichi.com/>  
E-mail [harumichi\\_saito@yahoo.co.jp](mailto:harumichi_saito@yahoo.co.jp)

選：飯沢 耕太郎

「これはまさにタイヤそのもの。かっこつけていないところがいい。あるものに興味を持って、あまり変なことを考えずに撮り続けて形にしてやりきる、こういう突き抜け方はすごく好きです。でも、衝動で撮っておしまいでなく、作り込んで見せられるものになっているところがいい。これは地面に寝転がってかなり近いところから撮ったのかな。ここまで近寄って撮るのはすごい。」



**澄(堀之内 毅)** すみ(ほりのうち たけし)  
「ある」

ブック/六切 / 52ページ

「有り難うございます。(以上)」

選：飯沢 耕太郎

「身内の方の死に向かい合う、重たいテーマをきちんとドキュメンタリーにしているのはいい。ただ、途中からテーマをヒロシマの問題や神戸の酒鬼薔薇事件などに広げ過ぎた感はある。社会全体の問題だと言いたいのはよくわかるが、見ている方はうまくフォーカスできないのではないか。でもそういう大きなテーマに取り組んでいるのは、大事な試みだと思う。」





**セサミスペース**  
**「girl girl girl」**

パネル/A1 / 6点  
ブック/ワイド四切 / 17ページ  
ブック/B5変型 / 18ページ

「佳作に選んでいただけてとても感謝しています。羊が草を反芻するかのようにも受賞をかみしめ、この賞を糧にさらにがんばりたいと思います。」

URL [www.sesamespace.net](http://www.sesamespace.net)

**選：蛭川 実花**

「ストレートじゃないですが、写真を使って作り込んだとてもセンスのいい作品です。センスのいいことってやはり大事なことで、これだけおしゃれに作れることは評価したいです。ただ、もっと突き進んだらいいのと思います。人の評価や、理屈、コンセプトなどを気にせず、自分の世界観でやりたいことをやり尽くしてしまったほうがいい。それが力になります。」



**竹内 寿恵** たけうちとしえ  
**「planet of Rabbits」**

プリント/サイズ多様 / 11点 / インクジェットプリント

「とても嬉しいです。ありがとうございます。」

**選：榎本 了巻**

「演出した作品というのが過剰に出回っているけれど、その中ではうまくまとめた作品です。パノラマに仕立てたのが見えて楽しい要素ですね。ファンタジーっぽい仕上がりですが、ヘンリー・ダーガーのようなある種の残酷さ、あるいは生命のリアリティーみたいなものが出てくるとよかったです。ちょっとかわいすぎるかな。演出して作る写真というのは王道からずれていますが応援したいですね。」



**田尾 昭典** たおあきのり  
**「ITCHY」**

パネル/大判紙 / 8点 / c-print

「少し罪悪感を感じるけれど、抑えることが出来ない甘い衝動。それを作品にしました。」

**選：南條 史生**

「雪の中での戦争の場面だけど、これは今の軍隊の装備ではない。白く飛ばした仕上げからも、いつの出来事なんだろうと感じさせる。ここではないどこかという感じ。現実でないものを写真で生み出せるということをこの作品は試みている。政治性や暴力も感じさせるが、どちらも主題ではない。むしろ白昼夢みたいな夢自体が主題のようだ。ゴヤの戦争を描いた版画を思い出させる。」



**竹原 優** たけはらゆう  
**「inevitable」**

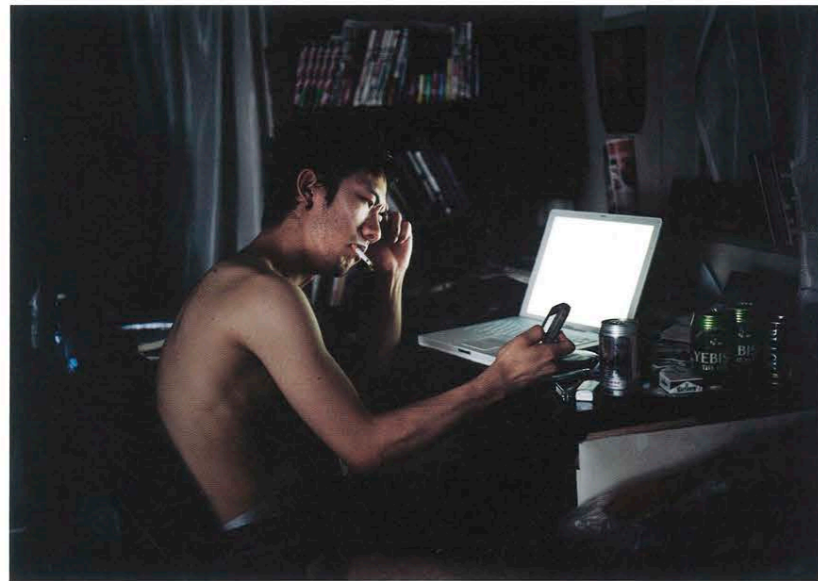
ブック/A3ノビ / 40ページ / ダブルプリント

「同性の私が感じる、女性の姿や世界観を表現しました。今後も新たな世界との出会いを期待して作品を作っていきます。」

**選：蛭川 実花**

「センスも良く、いくつかショッキングなビジュアルがあって作品として強いし、その人の生理的なことが感じられます。この路線をもっと追求してみたらどうでしょうか。ただ、ビジュアル的なことに偏りすぎているのかな。写真をいじることは悪くないのですが、小手先で楽しんでいるような感じもして、なぜ写真でスタートしたのか、そういったこともわかるといいですね。」





土田 祐介 つちだ ゆうすけ  
「display」

パネル/1,030mm×728mm / 5点 / インクジェット  
プリント

「現代の人と光をテーマにTVやケータイ  
のように表示する光のある風景を撮影し  
ました。」

E-mail tsuchida1201@yahoo.co.jp

選：南條 史生

「写真は光の芸術だが、この作品は光を効  
果的に使い、生み出されたシリーズである。  
現代文化の象徴であるモニターやテレビ  
のスクリーンの光源によって、フェルメール  
か、ファンタン・ラトゥールの作品のような  
効果が生まれている。うっすらと浮かび上  
がる周囲の情景が、その人物の生活、環境  
などを彷彿とさせる。主題の現代性とブラ  
イバートな空間の組み合わせ方が新鮮。」



長谷川 治胤 はせがわ はるつぐ  
「garden」

パネル/1,000mm×1,000mm / 3点 / インクジェット  
プリント、ニス、顔料 (日本画用)

「今回、このような賞を頂きありがとうございます。」

選：榎本 了彦

「カメラを通したクリエイションとして、どのよ  
うな表現が可能なんだろうという姿勢を感じ  
ます。一本の木を見つめているだけで、あ  
る種の潤いを感じるし、無国籍な時代の中  
で、アジア的、日本的な雰囲気復活させ  
ている。人間の心の深層にあるものに触  
れたいという態度をこの作家は持っている  
のではないかと。腰をすえて撮っているだろ  
うこの作品は、味わい深く見飽きません。」



土手 茉莉 とてまり  
「bokoboko」

フォトコラージュ、インスタレーション / 直径 240  
mm 3個 直径 180mm 30個 直径 150mm 87個  
/ 素材 マイティスクリアフィルム、刺繍糸、ビー  
ズ、ビニール、毛糸

「体から何かが生まれてくる感じ。  
それは成長なのか、余計なものなのか。」

選：榎本 了彦

「写真を素材にしながら物質化していくとい  
う仕事をしている人で、その表現が過激に  
なってきた気がしますね。リアルな写真を  
撮っておきながら、作品としてはかなりの部  
分を造形しています。平面である写真の存  
在の裏側を見直すと、そこに物質が見えて  
きて、それが写真を浸食していく。どこまで  
が写真なのか、写真の限界はどこなのか、  
作家がけんかを売っているようです。」



矢吹 健巳 やぶき たけみ  
「kill love history」

ブック/大四切/30ページ / インクジェットプリント

「何の感情もあてはまらないようにがんばっ  
て撮りました。ありがとうございました。」

URL <http://www.takemiyabuki.com>

選：飯沢 耕太郎

「イメージの選び方や構築の仕方が非常に  
うまい。性的な衝動や欲望を的確に形に  
している。ただ、技術があるために器用に  
まとめてしまっているところもある。今は、  
無意識の感情や衝動に少し距離を置いて、  
作品を作る材料として取り扱っているけ  
れど、そこに徹底的に溺れるか、逆にスタ  
イリッシュさを徹底させたほうがいいよう  
に思う。それと見る者の心を動かすユーモ  
アがほしい。」





吉弘 龍矢 よしひろ たつや  
「君を忘れたくない」

ブック/A3/45ページ/インクジェットプリント

「忘れたくない時間を写真に閉じ込めた。この作品は、私にとって青の時代であり、写真と共に生きたことの記録です。」

選：荒木 経惟

「まずタイトルがいい。中を見なくたって賞をあげたくなっちゃう。「忘れたくない」というこの気持ちがいいよね。忘れたいならば撮らないほうがいい、撮っちゃうとどうしても忘れられなくなっちゃうからね。構成も頑張ってるんだよ。桜で始まって桜で終わってる。桜の下には幸せと不幸が、生と死があるんですよ。無意識のだけど、いいんだよね。涙ですよ。」

## 蜷川 実花 インタビュー

女性誌のグラビアなどを中心にカメラマンとしても活躍する一方で、作品の写真集も毎年のように出版、2007年には映画『さくらん』の監督も務めた。多方面で活躍する蜷川実花氏の初の回顧展が、2008年から2010年にかけて、各地の美術館を巡回中である。忙しい毎日を送る蜷川氏の近況と、作品が生まれる背景を伺った。

インタビュー・文=阿古 真理

### 巡回展で約16万人\*を動員

今年、引っ越しをされたそうですね。

8月です。事務所と自宅と倉庫が別々にあったのを、1カ所に集めました。「蜷川さんが豪邸を買った」と噂になっていますが、賃貸なんですよ。2階の事務所部分は、お客さまに私の世界観が伝わるようにしたいと、プロのスタッフに作品のプリントを壁紙のように貼り付けて空間を作り込んでもらいましたが、要は展示会の設営と同じです。明け渡すときには、原状復帰できるようにになっています(笑)。

3階の住居部分は、自分の写真は1枚も置いていません。作品を作り出す場所というか、いろいろ考える場所で、過去のものに囲まれるのは嫌なんです。横尾忠則さんの絵とか、会田誠さんの作品とか、好きな作家の作品を飾っています。

2008年末に東京オペラシティアートギャラリーで開いた「蜷川実花展 一地上の花、天上の色」展が、今年も巡回中ですね。

岩手県立美術館、鹿児島県霧島アートの森が終わって、今は西宮市大谷記念美術館の会期中。12月からの高知県立美術館が最終です。西宮のオープニングが終わって帰ってきたと思ったら、高知の準備を始める時期で。今年は、展示ばかりしているみたい。社内でも「展示なんですけど」と誰かが言う。「高知と西宮のどっち?」と周りから聞かれるといった会話が飛び交っています。展示するのは同じ作品でも、会場によって形も予算も違うので、毎回ゼロから組み立てを考え直す必要があるんです。

たとえば、西宮は小さな部屋がいくつもあるんで、ちっちゃい展示会をいっぱいやっている感じ。鹿児島は、会場全体が吹き抜けになっていて、中2階にも展示ができます。鹿児島は、市内から車で2時間もかかる場所にあるのに、なんと入場者数が4万人になりました。道中、

「桃、1000円」みたいなぼりと一緒に「蜷川実花展」と書いたのぼりがある、そういう日常感覚がよかったですね。観客は若い女性が一番多いんですが、年配の方やお子様連れの方、いろいろな方が公園に行くみたいで来てくださって、「いいもんだな」と思いました。

今回の巡回展には、事務所の方全員が関わっておられるのですか?

そうではないです。事務所のスタッフには、写真の撮影と個展などの設営に関する責任者としてテクニカルディレクターがいます。そのアシスタントが2人。マネージメントチームが2人とデスクが1人です。事務所は私を入れて7人のスタッフとなり、けっこう大所帯になりました。過去にフォトグラファーとして独立した子もいますが、そんなにたくさんここから独立していったわけではありません。写真家の事務所を出て自分のカラーを出してやっていくのは、なかなか難しいようです。

### Noir誕生の舞台裏

この巡回展で初めて展示されたシリーズ「Noir(ノワール)」が、だいぶ貯まっておられるそうですね。

来年に、写真集を出す予定です。今は撮り貯めたものからプリントをセレクトしている状態で、ここからどういうバランスでまとめるか考えている最中です。「Noir」は足かけ3年ぐらい撮っていますが、本にするぞと決めた時点で7割ぐらい形ができていますよ。じゃあ、本にするには何が足りないんだろうと考えて、ダッシュがかかって残り半分ぐらいの写真が撮れます。

「Noir」は夜の写真が多いんですが、それは当時1歳の息子が寝ないと撮れなかった、という理由もあります。仕事が終わって帰る車の中で寝てくれると、作品を撮りに行ったという写真が多いです。

すごい枚数の撮影になっていますね。

コンセプトを決めてこの1枚というふう撮るのではなくて、私みたいに気になったものを撮ってあとでまとめる場合は、枚数が必要です。ベタ焼きを見ればわかりますが、「Noir」の合間に、花の写真集に入りそうな写真や記念写真、息子を撮った写真が混在しています。いくつかのテーマが1本のフィルムに入っているんで、ネガの整理がすごく大変。行った国ごとにまとめたりにしています。

なぜ、枚数が必要なのですか?

たとえば30点撮ったテーマで、本当に強度があるのは、3点ぐらいだったりする。この3枚を30枚、60枚、90枚に増やすには、撮るしかないんです。「これがなきゃ、すんなりテーマが見えるのに」という写真は、一度全部外してみます。そうすると、すごく少なくなるかもしれませんが、そこで残った写真を確認して、そのレベルの写真を増やす。そうやって撮った膨大な写真の中から選びます。写真家の仕事は、つくづく選んでいく作業なんだなと思います。

作品を選んで写真集の土台を作るのは繊細な作業なので、脳がさえて何か降りてくる瞬間を待ちます。日常生活は邪魔が入りやすいので、夜中にやったり、ホテルに部屋を取って、昼寝をしたりプールへ行ったりしながら、「よし」と思ったタイミングで始めるようにしています。今は子どもがいるので、夜中に泣き出したりして、いつ中断するか分からない。1〜2カ月中にやらないといけないと思いつつ、まだ手をつけていないんです。

お子様がいて、仕事の仕方が変わりましたか?

集中度は上がっています。前は、撮る時も何かが降りてくる瞬間を待っていたんですが、今は状況が整ったときに、撮れる状態に自分で絶対持っていけないといけません。貴重な時間

\* 2009.12.08時点の東京、岩手、霧島、西宮の4会場の合計。最終会場である高知の数値は含まれておりません。



なので、瞬時に切り替えられるようになってい  
ます。仕事の場合は意外と大丈夫なんです。何  
時から何時までモデルさんがいて、時間が区  
切られているので。でも、作品は日常の中で歩  
いて歩いて探していくので、子どもと一緒にい  
ると本当に大変です。

この間、「休むって選択肢もありましたよね」  
と人から聞かれて、目から鱗でした（笑）。考  
えもしなかった。でも、私の場合はあり得ない  
選択肢だったんです。撮っていないとバランス  
を崩すから。でも、子どもとも1分1秒でも長く  
一緒にいたい。なるべく一緒にいながらさらに  
クオリティーを上げるには、どうしたらいいんだ  
ろうと、ひたすら悶々としています。

## ポジティブパワーの源

**蛭川さん自身も、ご両親から愛されて育って  
いますよね。だからこそ、幸福感のある作品  
世界を作れるのではないのでしょうか？**

私は5歳まで母が仕事に出て、父に育てられ  
たんです。専業主婦のお母さんのように、母  
と一緒にいなかったんですが、ずっと愛されて  
育ったと思っています。だから基本的に打たれ強  
いんです。

昔は「なんでそんなに自信満々なの」って  
言われたんですが、仕事をして周りからの評価  
が上がり、今は「なんて謙虚でいい人なの」と  
言われる（笑）。でも、私自身は展覧会で16万  
人入ったから偉いとは思ってなくて、最初から  
持っているわけのわからない自信が、経験を積  
む過程で育ってきたと思います。

仕事でタレントさんなどのポートレートを撮  
る間は、その人のいいところしか本当に見えな  
いし、好きになって写真を撮っている。事務所  
のスタッフでもそうですが、相手の好きなところ  
を見つけて伸ばしていくのが本当に好きだし得  
意なんだと思います。だから、両親にはすごく  
感謝しています。

**「好き」という感情は、蛭川さんのお仕事の中  
で重要なポイントではないでしょうか？**

確かにそうです。インタビューなどで語らせ  
てもらえる機会は多いので、いろいろと言葉にす  
るんですが、基本的には「だって好きなんだも  
ん」なんです。若い時は、「どうして女の子っ  
ぱい写真って言われるんだろう」とわからな  
かったんですが、映画『さくらん』を監督してか  
ら、結局「好きなんだもん」しか私にはないん  
だとよくわかりました。監督は自分が手を動か  
さないなので、スタッフの人たちに「ここがこう

う風に素敵なんで、こう撮ってください」とか「こ  
ういう理由でこうしてほしいです」と、一生懸命  
言葉を尽くすんですが、最後は「女の人はそ  
うなんです」と。本当に感覚的に好き、というこ  
とでやっている自分を初めて認識しました。

**蛭川さんは、男性とは違う女性写真家という  
立場で意見を求められることが多いと思いま  
す。でも、実際は男性批判というより、女性で  
あることの肯定感が強いんですね。**

そこにすごく需要があったんだなと気づかさ  
れたのは、映画を撮ったときでした。「女性監  
督というのは、大変ですよ」と暗に男性に対  
する批判を求める取材がすごく多かったん  
です。「全然そんなことないです」と、言っても言  
って伝わらない。女性だから大変という経験  
もありますけれど、男の人だから大変なこともあ  
る。私自身は、男性社会に対してあれこれ言  
いたいという気持ちは全然ないんです。

私が、あまりそういう批判をしたいと思わな  
いのは、上の世代の女性がその道を開拓してく  
れたからだと思います。だから肩肘張らずに仕事  
ができる最初の世代なんじゃないかと思ってい  
ます。たとえば、撮影がある日にハイヒールとス  
カートを履いていても、文句を言われません。  
むしろ「きれいにしていて偉いね」と褒められる  
ことがあるぐらいです。

## 続ける厳しさと面白さ

**一線の仕事をしていく秘訣は何ですか？**

基本的に人気稼業なので、怖さは常に感じ  
ています。デビューが女の子写真ブームという  
一過性のブームの中で出てきているので、この  
大海原をどう乗り切るか、というのが最初から  
ありました。どういうふうに残るかという課  
題の中に十数年身を置いています。最初は、ひ  
とつひとつの撮影が試験みたいなものでした。  
フリーランスは最末端業者なので、よくなかつ  
たら簡単に切られる。始めの1～2年は、1回失  
敗した得意先からは5～6年仕事が来ません  
でした。些細な失敗でも、必ず予想よりいいも  
のを返さないと、仕事につながっていかなか  
ったんです。

作品は自分が好きなものを好きな時間帯に  
撮って、愛情を持ってゆっくりまとめることが  
できます。でも、仕事はある限られた時間で実  
力を発揮して、さらに自分のカラーを出しつつ  
コンスタントにやり続けなければいけない。スタ  
ジオ出身とか、最初から商業的な訓練を経て  
仕事を始めた人は違うんですけど、作家志望で

出てきた人はそこが本当に大変です。私も7年  
ぐらしかかりました。

大事なのはやり続けること。デビュー当時は  
無視していた評論家の方が、「おれ、最初は全  
然ピンとこなかったけれど、おもしろいね」と言  
ってくれたり、急にいろいろな人が「蛭川実  
花はおもしろい」と言い出した時期があったん  
です。継続は力なりです。

**仕事の写真が、作品と違うのはどんなところ  
ですか？**

仕事は、目的が決まっています。飲料水だつ  
たら、その飲料水を売る。ブランドならそのイ  
メージをアップさせたい。その目的を逸れたら、  
いくらい写真を撮っても何の価値もない。あ  
とは見る人の判断。この間、私がやっている『M  
girl』という雑誌で嵐の相葉くんを撮ったん  
ですが、ファンの人が何を見たいかをすごく考  
えるわけです。基本的に、この仕事はサービ  
ス業なので。見ていただくとわかりますが、こ  
の写真は蛭川実花っぽさは全部捨てています。  
カラフルでも何でもなし、背景の作り込みも  
一切していない。相葉くんがいかにカッコよ  
く見えて、読者の女子がどれだけもらえるか。  
その結果、この雑誌は嵐ファンが買い占めて、  
店頭にもまったく並ばなかったぐらい反響があ  
りました。

**今後のご予定を教えてください。**

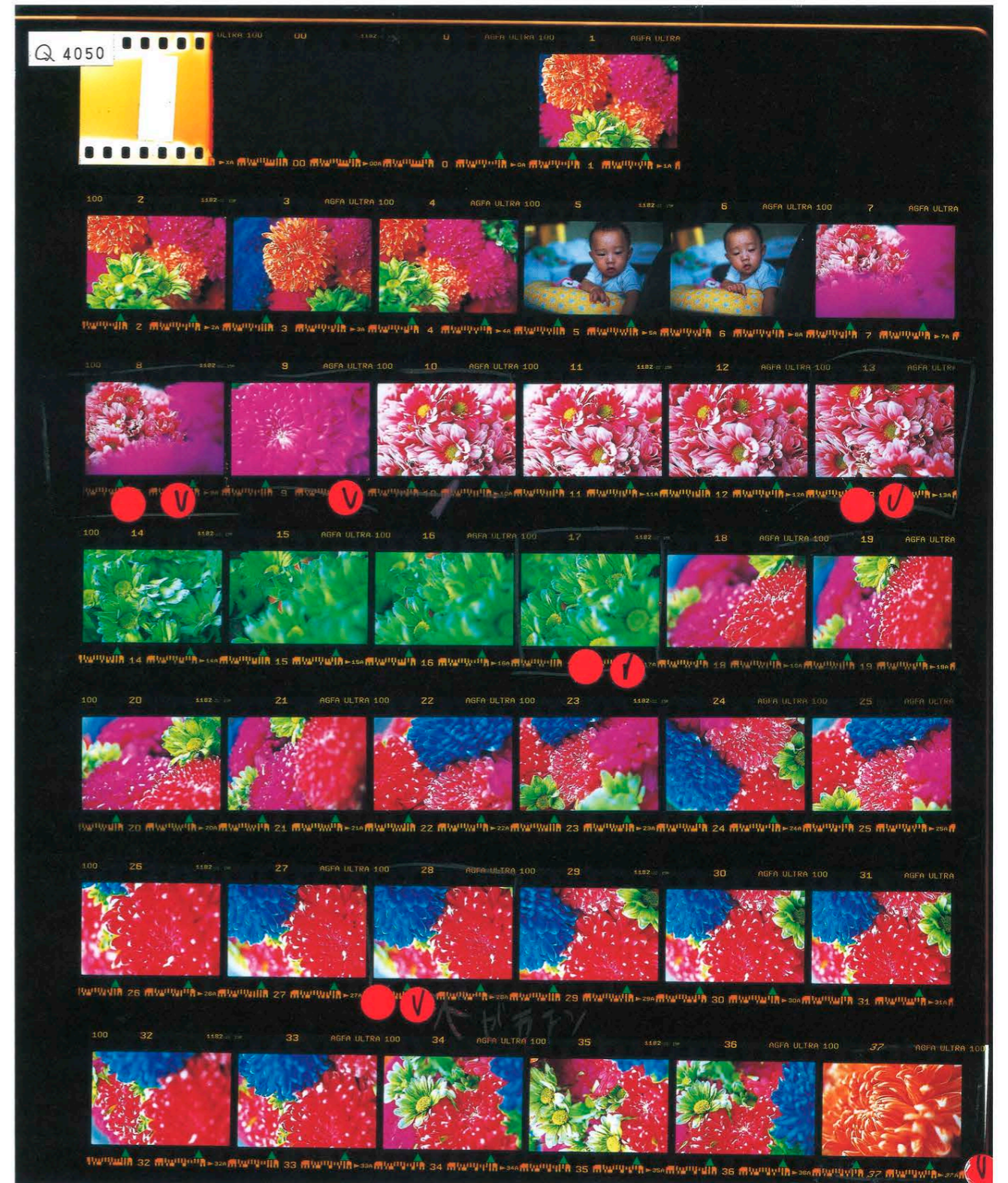
これからも、仕事と作品とを両方やります。  
いろいろなことをして喜んでもらいたい。その  
なかで自分を表現していくのが好きなんです。  
来年の秋、イタリアの大手出版社、リッソー  
リからベスト盤みたいな写真集が出る予定  
です。ヨーロッパ、アメリカ、それから日本に  
も少し入ってきます。世界制覇へわかりやす  
く第一歩（笑）。あとアジアへ、タレントさん  
の写真集みたいな世界観で行きたい。「女の  
子でよかった。蛭川さん好き」みたいなファン  
層が中国あたりで生まれなかなど狙っています。

（2009年10月20日）



好きなものを好きな時間帯に撮られたという、作品制作のための写真のベタ焼き。  
その中には、蛭川さんのお子様の写真も。







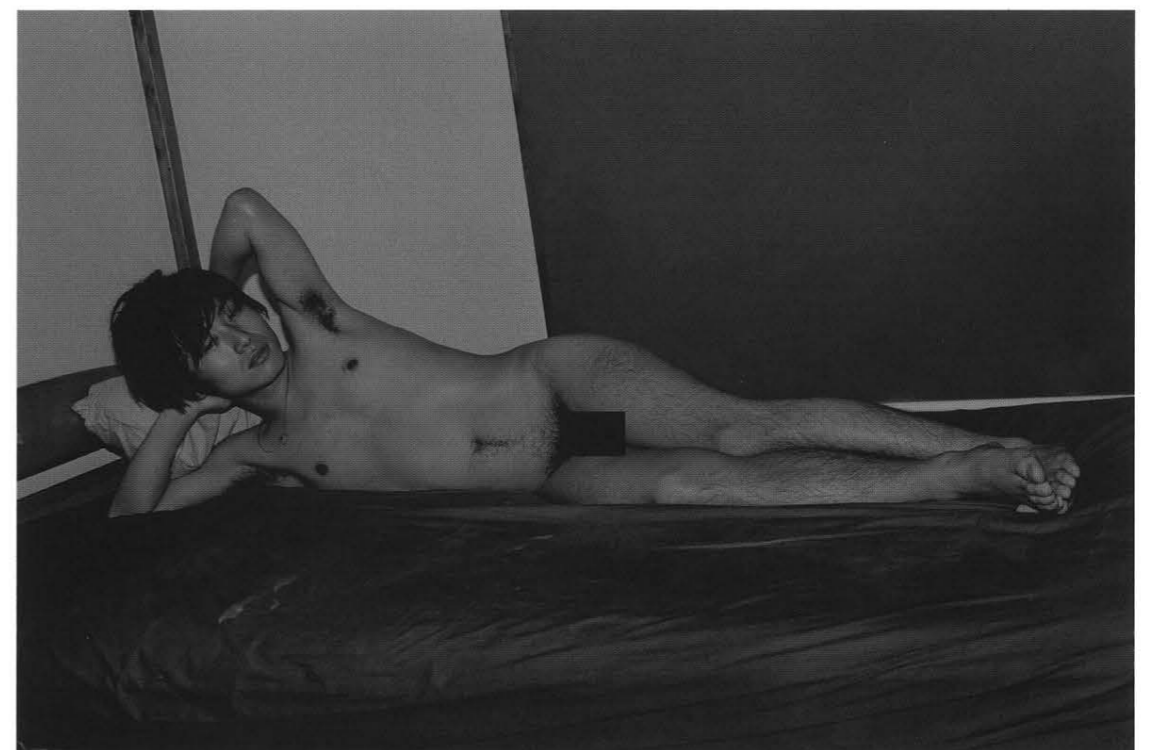
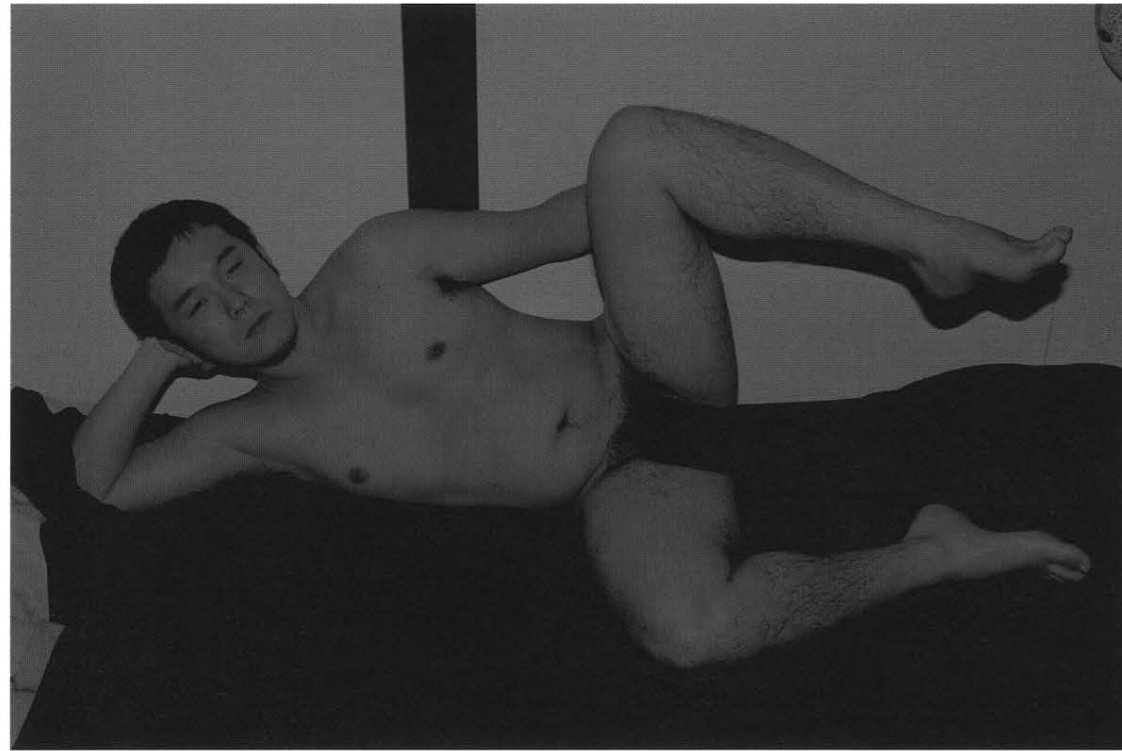




秦 雅則

「幼稚な心」

今回、数年前から撮りすすめていた「柔らかな肉」<sup>®</sup>という同世代の男女肖像写真群から一部を選択し、その写真と写真を見せる空間とを総体として呈示することで「幼稚な心」という作品とした。尚、男女の陰部にはテープが強引に貼られ露出しないようにされている(冊子上では黒塗りとなる)。これは日本の法律上の規制でもあるが、作家としての意図があり、そうしてあることを伝えておきたい。  
※正式名称「柔らかな肉/私はこれを受とする。貴方はどーするの?」





## 写真新世紀の歩み

「写真新世紀」は、写真表現の新たな可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的とした公募コンテスト。1991年に年4回の公募で始まった写真新世紀ですが、1994年から年2回の公募、そして現在では年1回の公募に集約され、32回を数えるまでになりました。応募者数も毎回1,000人を超える規模に成長し、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。また、受賞作の展示や受賞者のトークショーを行う受賞作品展でも、多くの来場者を集め、「写真の現在」を広く伝える役割を担っています。

### 【レギュラー審査員】

荒木 経惟 (写真家) 飯沢 耕太郎 (写真評論家) 南條 史生 (森美術館館長) 森山 大道 (写真家 2002年～2007年) (五十音順、敬称略)

	応募者数	グランプリ	優秀賞	ゲスト審査員
1992 第1～4回公募	483人	木下 伊織	岩崎 昌弥 小川 嘉朗 奥谷 佳子 オノデラユキ 今 義典 清水 麻弥 辰本 まこと 千葉 鉄也 ノニータ (谷野 浩行) 野村 浩 山本 美奈	
1993 第5～8回公募	505人	市川 綾子	遠藤 年勇 大橋 仁 金城 民子 河野 安志 高橋 ジュンコ 土井 弘介 中山 英輔 西 光一 野村 浩 宮本 知保 茂木 綾子	
1994 第9、10回公募	703人	熊谷 聖司	大森 克己 小倉 英三郎 金子 亜矢子 白土 恭子 ジャン＝クロード・ベレグー リン・デルビエール	ロバート・フランク (写真家) 坂田 栄一郎 (写真家)
1995 第11、12回公募	456人	HIROMIX	A・R・T Puff 坂本 浩 佐内 正史 柴原 三貴子 野沢 文子 バトリシア・ガバス 本田 かな	ジャン＝クロード・ルマニー (フランス国立図書館名誉コンセルバトゥール) 浅葉 克巳 (アートディレクター)
1996 第13、14回公募	587人	野口 里佳	加藤 直司 菅野 純 黒瀬 英文 蛭川 実花 早船 ケン 吉田 優 ロス・バン・ホーン	伊島 薫 (写真家) 椎名 誠 (作家)
1997 第15、16回公募	537人	矢島 慎一	伊藤 トオル ヴァレリー・ブラン 慶 高城 典子 山本 香 山本 耕司	カシン・リー (写真家) 森山 大道 (写真家)
1998 第17、18回公募	771人	柏 亜矢子	池田 宏彦 岩崎 マミ 黒瀬 康之 佐藤 純子 ヴェロニック・シリア 藤原 江理奈 守田 衣利	ベルナール・フォコン (写真家) ホンマタカシ (写真家)
1999 第19、20回公募	759人	安村 崇	伊賀 美和子 遠藤 礼奈 岡部 桃 田邊 晴子 長尾 智子 矢ヶ崎 祐子 吉田 優	サラ・ムーン (写真家) 長野 重一 (写真家)
2000 第21、22回公募	944人	中村 ハルコ	佐藤 篤 佐野 方美 澤田 知子 鈴木 良 谷口 正典 中村 年宏 山田 大輔	横尾 忠則 (画家) 倉石 伸乃 (評論家) ジル・モラ (アートディレクター)
2001 第23、24回公募	881人		今井 紀彰 佐伯 慎亮 新沢 もも たけむら 千夏 中谷 理子 中西 博之 西郡 友典 吉岡 佐和子	木村 恒久 (グラフィックデザイナー) 都築 響一 (エディター)
2002 第25回公募	1,004人	吉岡 佐和子	岡本 英理 鍛冶谷 直記 SABA (高橋 宗正、中島 弘至) ヨシダ ミナコ 吉本 尚義	マルク・リプー (写真家) 東松 照明 (写真家)
2003 第26回公募	1,150人	内原 恭彦	植本 一子 加藤 純平 藤田 裕美子 法福 兵吾 ヤマダ シュウヘイ	マーティン・パー (写真家) 鈴木 理策 (写真家)
2004 第27回公募	1,087人	(準グランプリ) 川村 素代 滝口 浩史	大庭 英亨 ふじい あゆみ 山下 豊	ケビン・ウエステンバーグ (写真家) やなぎ みわ (美術作家)
2005 第28回公募	1,324人	小澤 亜希子	新垣 尚香 梶岡 祿仙 とくた はじめ 西野 壮平 林口 哲也+松村 康平	ウィリアム・エグルストン (写真家) 蛭川 実花 (写真家)
2006 第29回公募	1,505人	高木 こずえ	喜多村 みか+渡邊 有紀 清水 朝子 Palla 辺口 芳典 山田 いずみ	日比野 克彦 (アーティスト) ポリス・ミハイロフ (写真家)
2007 第30回公募	1,277人	(準グランプリ) 黒澤 めぐみ 詫間のり子 中島 大輔	青山 裕企 田福 敏史 中里 伸也	榎本 了亮 (アートディレクター) 具 本昌 (写真家)
2008 第31回公募	1,517人	秦 雅則	岡部 東京 小山 航平 菅井 健也 保谷 綾乃 元木 みゆき	榎本 了亮 (アートディレクター) 大森 克己 (写真家) 野口 里佳 (写真作家)

## 写真新世紀

### 2009年度 (第32回公募) 概要

応募申込期間：2009年4月14日～6月11日  
 作品受付期間：2009年4月14日～6月18日  
 応募者数：1,340名

### 【グランプリ受賞者】

クロダ ミサト

### 【優秀賞受賞者】

Adam Hosmer、杉山 正直、高橋 ひとみ、安森 信

### 【佳作受賞者】

生鷹 俊介、池田 衆、岩瀬 菜美、大川 正太、キリコ、クロダ ミサト、齋藤 陽道、杉本 智美、澄 (堀之内 毅)、セサミスペース、田尾 昭典、竹内 寿恵、竹原 優、土田 祐介、土手 茉莉、長谷川 治胤、矢吹 健巳、吉弘 龍矢

### 【レギュラー審査員】

荒木 経惟 (写真家)、飯沢 耕太郎 (写真評論家)、南條 史生 (森美術館館長)

### 【ゲスト審査員】

榎本 了亮 (アートディレクター)、蛭川 実花 (フォトグラファー)

写真新世紀誌第24号

発行責任者：キャノン株式会社 渉外本部 社会文化支援部長

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。

© 2010 Canon Inc. All right reserved

非売品

# Canon

make it possible with canon

キヤノン株式会社 渉外本部 社会文化支援部 文化支援推進室  
〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2  
TEL: 03-5482-3904 / FAX: 03-5482-9623 ホームページ: [canon.jp/scsa](http://canon.jp/scsa)



本印刷物は、エコマーク商品の大豆油インク (LOW NON VOC) を使用して印刷されています。

PUB. NCP04 0310SZ12 Printed in Japan